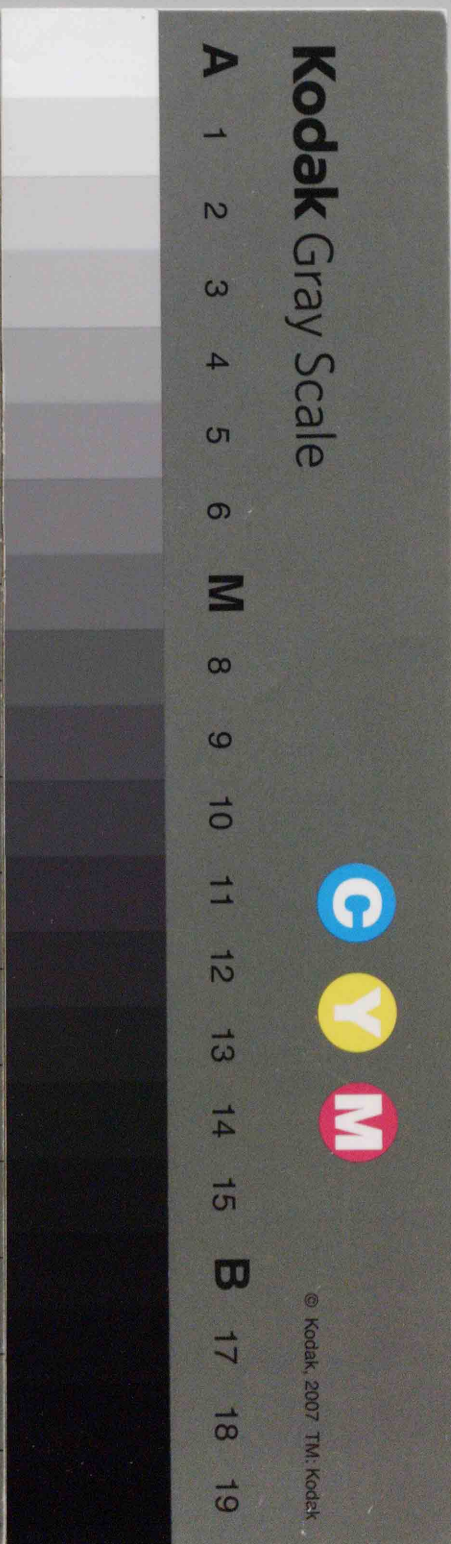
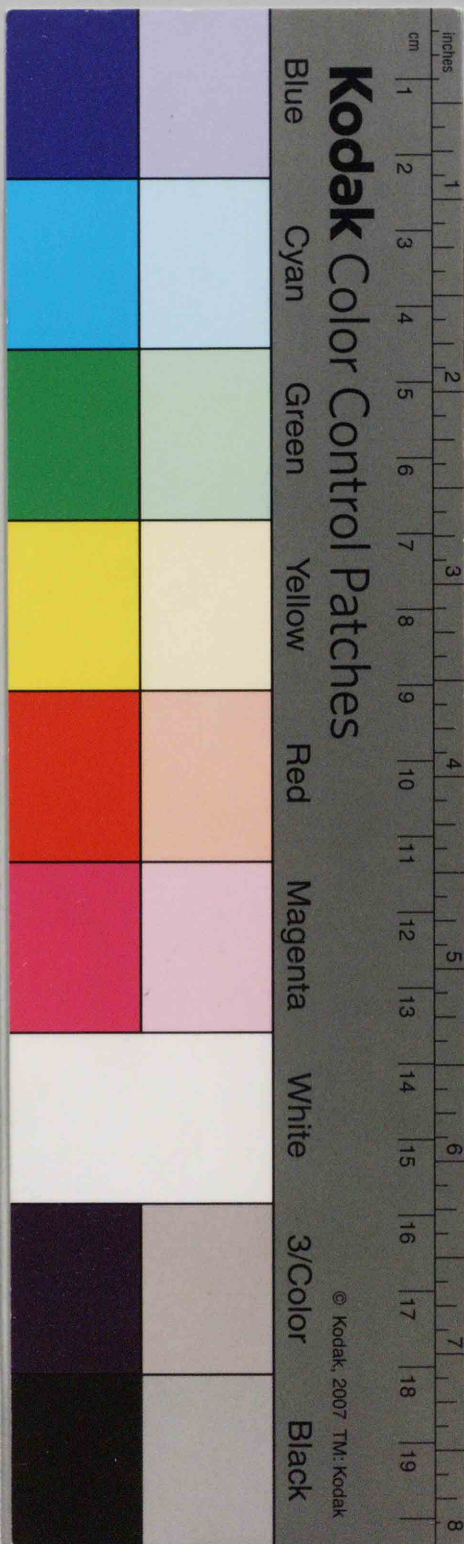
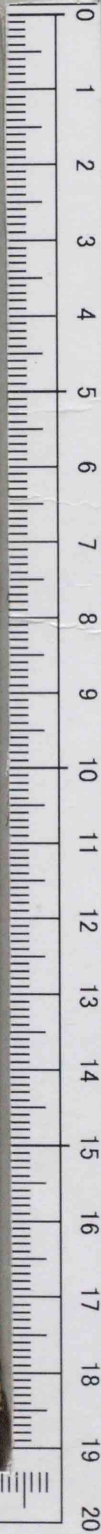


訂三
帝國讀本
卷九

教科書文庫
4
810
41-1923
2000067990



41595

教科書文庫

4
810
41 1923
20000 67990



資料室

教科書文庫

4

810

41-1923

2000067990



目次

訂三帝國讀本卷九目次

一	國體の精華……………	一
二	神武天皇と後醍醐天皇……………	七
三	朗詠……………	三
四	羽衣……………	二七
五	富嶽の詩神を懷ふ……………	二四
六	人情と詩美……………	六
七	俳句新調……………	三
八	世界の四聖 其の一……………	三七
九	世界の四聖 其の二……………	四

4a
810
大12

日四十月一十年二十正大
濟定檢省部文

文學博士芳賀矢一編

大正十三年版

訂三帝國讀本

東京

會社資富山房叢兌

広島大学図書

2000067990



一〇	千里が竹 其の一	五二
一一	千里が竹 其の二	五七
一二	儒の道をわらふ	六三
一三	國學	六七
一四	方丈記 其の一	七一
一五	方丈記 其の二	七六
一六	方丈記 其の三	七九
一七	澄の江の浦	八六
一八	アルプを越えつゝ 其の一	八九
一九	アルプを越えつゝ 其の二	九六
二〇	菊花の約 其の一	一〇一
二一	菊花の約 其の二	一〇八

二二	秋のちまた	一一八
二三	舟 旅 其の一	一二三
二四	舟 旅 其の二	一二六

自修文

一	菅笠日記	一
二	古學の傳統	七
三	羽衣の傳説	一四
四	和歌百首	一九

卷九目次終

三訂帝國讀本卷九

一 國體の精華

穗積 八束

血統團體

我が日本固有の國體と國民道德との基礎は、祖先教に淵源す。祖先教とは祖先崇拜の大義を謂ふ。我が日本民族の固有の體制は血統團體たり。血統團體とは、民族が其の同始祖を敬愛するによりて共存團體を成し、祖先の威力に服従するによりて平和の秩序を維持するを謂ふ。小にしては家を成し、大にしては國を成すものなり。祖先崇拜の大義は、血統團體を構成し維持するの原由たると同時に、血統團體の存

軌轍

續は、また祖先崇拜の大義を鞏固にし深遠にするの效果あり。二者相待ちて消長し、須臾も離るべからず。而して我が固有の國民道德たる忠孝、友和、信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に淵源し、血統團體を保持するの軌轍たり。我が堅固なる家國の體制は祖先教の基礎の上に立つ。之を千古に維ぎ之を萬世に傳ふるは我が民族の特質にして、我が國體の精華とする所なり。

人は孤立獨存し得べきものにあらず。共同團結以て其の生存を全うす。而して其の團結する原由と形體とは固より一ならず。但し利害を以て集散し、約束を以て協和を維持するものは其の團結固からず、又久しからず。利害の異同は生存の狀況に隨ひて時に變轉し、人爲の約束はまた人爲を以

て解除せらるゝを免れざればなり。血族相依るは自然の團結なり。兒孫が父母の保護の下に團欒するは社會の初にして、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團結たり。血脉相通ずるは天然の連鎖なり。人爲を以て之を絶つことを得ず。利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情に由り、離るべからざるの共同生存を成すものは血統團體なり。

血統は之を祖先に受け、之を子孫に傳ふ。故に其の團結は永久なり。血族關係は利害を以て離合斷續するを得ず。故に其の團結は鞏固なり。而して之を統一するものは祖先の威力なり。子孫の祖先の威力に服従するは、對等の約束ならざれば、敬愛の情厚く、忠順の念深し。家に在りては、家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して家長權を行ひ、國にありては、

家長權

統治權

天皇は天祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とは、共に君父が其の祖先の慈愛する子孫を祖先の威靈に代りて保護する權力なり。

餘慶

吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、維持し、遺傳したるの餘慶なり。何が故に血統相近きもの相依りて家を成し、民族を成し、また國を成したるか。祖先を崇拜し、其の威力と慈愛との下に、生存の保護を全うせんと欲する天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、其の慈愛なる保護の權力に従順なる至情は、延いてこれを其の父母の父母に及すべし。吾人の祖先の祖先は即ち畏くも我が天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國民の宗家たり。父母拜すべし、況や一家の祖先をや。一家の祖先拜すべし、況や

忠孝一致

軌道

一國の始祖をや。家長の位は祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は現世に在る祖先たり。天皇は現世に在る天祖たり。父母に孝なるべき所以は、即ち皇室に忠なるべき所以にして、之を一貫するの國教は、即ち祖先の崇拜なり。此の大義は吾人の祖先が國家を成したる基礎にして、吾人が之を永遠に維持するの軌道たるものなり。

絶對の理法

人は信仰によりて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の現象を總合して之を其の根柢の眞理に歸結し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫を慈愛する父母の威靈は、顯界に於て其の肉體を喪ふも、尙幽界に在りて其の子孫を保護することを確信したり。これ祖先崇拜の

顯界
幽界

祭政一教一
後相レカ

吾人は祖先の生命の繼續にして子孫の吾人の生命の延長なり

大義の淵源にして、敬神の我が國教たる所以なり。我が固有の國體、民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし、家は祖先の威靈の住む處、國は天祖の威靈の住む處にして、祖先の威靈は國家を防護す、吾人は祖先の生命の繼續にして、子孫は吾人の生命の延長なり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは、吾人の肉體に於て代表せらるゝ祖先の生存を永遠に傳へんと欲するなり。祖先と吾人と子孫とが國家の觀念に於て同化し、其の繁榮にして永久なる存在を全うするの大義ここに存す。祖先の靈位を現世に代表する君父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先が其の子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の共愛、すべて皆我が同祖の祭祀を重んじ、之を永遠に傳へ、祖先の家國の

鞏固にして永久なることを欲する祖先の遺志に適從する道ならざるはなし。我が祖先崇拜の大義は國民の確信に出で、不朽の國體はこれによりて其の基礎を立て、國民の道徳は之によりて深厚を加ふ。萬世に亘りて、此の國、此の民を保持するものは、此の國體の精華たる我が固有の祖先教の力なり。

—愛國心—

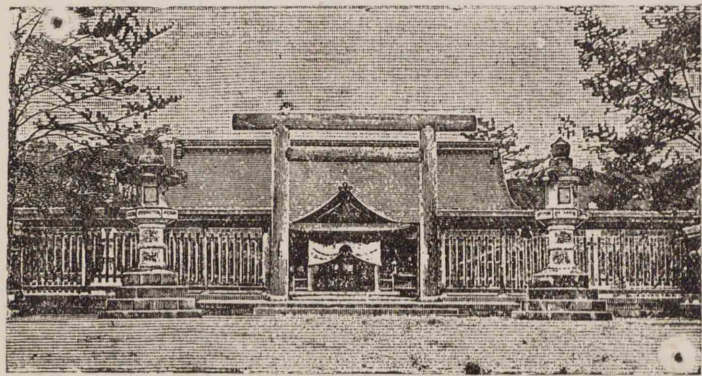
二 神武天皇と後醍醐天皇 幸 田 露 伴

申すもいと畏けれど、我が邦創業の帝神武天皇、(一)孔舎衛坂(二)の戦に、御兄君五瀬命を敵の矢の爲に失ひ給ひて、甚だしく御憤懣あらせられ、誓つて長髓彦に天誅を加へんとし給ひし御時は、如何に勇猛壯烈に、大御心の思し給ひしがまゝを

(一)河内國中河内郡生駒山北麓の登路。

御歌に述べ給ひしぞや。

みつくし



既に撃たれぬ。我が心尙痛む。忘れんや、忘れんや。おのれ醜虜

みつくし。しくめの子等が、粟生には、かみら一本、そねが本、そねめつなきて、撃ちてしやまん。

櫃と歌ひ給ひ、又

原 みつくし。し來目の子等が、垣本

神 に、植ゑしは、じかみ、くちひ、く

宮 我は忘れじ、撃ちてしやまん。

と歌ひ給へる御威勢の烈しき、御心の猛々しき。葦、薑を食へば餘味こゝに在りて、我が口こゝに疼む。我が兄

いさぎよし
なんど申す
も畏し

撃屠らでは如何で止まん。と御目に觸れし葦、薑に御情を寄せ給ひて、御言葉のあやをなし出で給へる、いさぎよしなんど申すも畏き御歌なり。

建武中興の帝後醍醐天皇は、これ將申すも畏けれど、英明に渡らせ給ひし御門なり。されど其の歌の御こゝろ御すがたは、世の異なるが爲もあるべけれど、いたく神武天皇のとはさま異なり。

秋毎のならひと思ひし露時雨

ことは袖の上にぞありける

と詠じ給へる、

まだなれぬ板屋の軒のむら時雨

音をきくにも濡る、袖かな

涙はふり落ち

とあそばされたる、臣子の分としては、我が日の本の本の天皇の
かゝる御詠ありしかと思へば、畏ながら御いたはしさに涙
はふり落ち、かゝる御歌を御詠ありたる其の世いと恨めし
く口惜し。

うづもるゝ身をば歎かずなべて世の

くもるぞつらき今朝のはつゆき

の御歌は、大御心の深く廣き、おろかなる身にも大凡は推測
り奉られて、これまた涙とゞめあへず。

身にかへて思ふとだにも知らせばや

たみのこゝろのをさめがたさを

の御歌は、聖意いと畏く、恐多き極みの御詠なり。

物思はで過ぎつるかたの年つきは

いかに寝し夜の夢にかあるらん

と懷舊の情を詠み給ひたる、
吉野の行宮にていかなる折
にか、

あだに散る花を

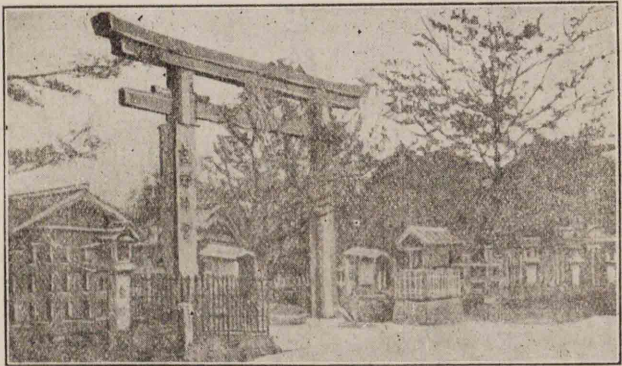
おもひの種として

この世にとめぬ

こゝろなりけり

と感慨し給ひたる、同じ行宮
にて御風邪めしたる時、

この世にと
めぬ心



吉野神宮

露の身を草のまくらに置きながら

かぜにはよもと頼むはかなさ

扈從

と詠じ給へる、御扈從の人々打續き身身マカ死シりける時、

こととはん人さへ稀になりけり

わが世の末のほどぞ知らるゝ

と御心細くものし給ひたる、同じ行宮にて、

ふしわびぬ霜寒き夜の床はあれて

袖にはげしき山おろしのかぜ

と詠じ給へる、船上山にて名和長年に賜ひたる

忘れめやよるべも浪浪ナミの波のうらいそを

みふねの上にとめしこゝろは

の御詠の如き、なべて一天萬乗の御歌とし思へば、臣子の分

としては、涙無くしては拜誦しまるらせ難し。 — 調言 —

忘れめや
よるべも浪
のあらいそ

三 朗 詠

春 興

野草芳菲紅錦地 遊絲繚亂碧羅天

(一) 劉禹錫

もゝしきの大宮人は暇あれや

櫻かざして今日もくらしつ

(山部赤人)

春 夜

背燭共憐深夜月 踏花同惜少年春

(二) 白居易

はるの夜の闇はあやなし梅の花

色こそ見えね香やはかくるゝ

(凡河内躬恒)

納 涼

池冷水無三伏夏 松高風有一聲秋

(三) 源英明

したくゝる水に秋こそ通ふらし

(一) 唐の詩人。

(二) 唐の詩人。

(三) 平安時代の文
人。天慶三年
歿。六〇〇

(一)平安時代の宮女。中務卿敦慶親王の女。

(二)唐の詩人。

(三)桓武天皇の皇子。

(四)歌人。天曆二年(一六〇八)年六十。歿。

(五)天延二年(一六三四)年九十六。歿。

むすぶ泉の手さへすゝしき

(中務)

郭公

一聲山鳥曙雲外

萬點水螢秋草中

(許渾)

さつきやみおぼつかなきを時鳥

なくなる聲のいとゞはるけき

(明日香王子)

ゆきやらで山路くらしつ時鳥

いまひとこゑの聞かまほしさに

(源公忠)

秋興

林間煖酒燒紅葉

石上題詩拂綠苔

(白居易)

秋はなほ夕まぐれこそたゞならね

をぎの上風はぎのした露

(藤原義孝)

八月十五夜

(一)平安時代の文人。菅原道真の門人。

(二)平安時代の文人。永観元年(一〇四三)年七十三。歿。

(三)歌人。古今集撰者の一人。

(四)儒者又能書家。村上天皇に仕ふ。

三五夜中新月色

二千里外故人心

(白居易)

十二廻中無勝於此夕之好

千萬里外皆爭於吾家之光

(紀長谷雄)

水の面にてる月なみを數ふれば

こよひぞ秋のもなかなりける

(源順)

雪

雪似鷺毛飛散亂

人被鶴筆立徘徊

(白居易)

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにける

いづれを梅とわきて折らまし

(紀友則)

餞別

前途程遠馳思於雁山之暮雲

後會期遙霑纓於鴻臚之曉淚

(大江朝綱)

秋風にはづかりのねぞ
 きたが玉章を
 かけて來つ
 らん 友則
 山腰歸雁斜
 牽虹水面
 新虹未展
 市中 在中
 春霞たつを
 見すてゆ
 なく雁の花
 や里に住み
 やならへる
 伊勢

おもひやる
 心ばかりは
 さはらじを
 なに隔つらん
 峯の白雲

(一) 橋直幹

祝

あつたふほつもの
 うねなほまうもよつと
 せしきき
 山腰歸鴈斜牽虹水面新虹
 未展中
 中

(筆成行原藤)集詠朗漢和

(二) 平安時代の文人。

嘉辰令月歡無極 萬歲千秋樂未央
 長生殿裏春秋富 不老門前日月遲

(源英明)

(慶滋保胤)

ワキテ 天人
 ワキツレ 漁夫
 (一) 風早の三保の浦曲を漕ぐ舟の浦人騒ぐ浪路かな
 (二) 詩人玉屑に千層好山雲乍散一樓明月雨初晴
 (三) 忘れずよ清見が關の浪間よりかすみて見えし三保の松原
 (四) 冷泉爲相の歌「風向ふ雲の浮浪立つと見て釣せぬ人」

君が代は千代にやちよにさされ石の
 いはほとなりて苔のむすまで

(よみ人知らず)

四羽衣

ワキ一聲風早の三保の浦曲を漕ぐ船の浦人騒ぐ浪路かな。
 ワキサシ謠「これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。
 ワキツレ謠「萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨初め
 て晴れたりげに長閑なる時しもや、春のけしき松原の浪立
 續く朝霞月ものこりの天の原及びなき身の眺にも、心空な
 る景色かな。歌「忘れめや、山路をわけて清見瀉、遙かに三保
 の松原に、たちつれいさや通はん。風向ふ雲のうき浪たつと
 見て、釣せて人や歸らん待てしばし、春ならば、吹くものど

虚空

色香妙にし

けき朝風の、松は常磐の聲ぞかし浪は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。ワキ詞われ三保の松原にあがり、浦の景色をながむる所に、虚空に花ふり、音楽聞え、（れい）靈香四方に薰ず。これたゞごとと思はぬ所に、これなる松に、美しき衣かゝれり。よりて見れば、色香妙にして、常の衣にあらず。いかさまとりて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存候。

シテ詞、なう、其の衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。

ワキ詞、これは捨ひたる衣にて候程に、とりて歸り候よ。シテ詞

奇特

「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物に非ず。元の如くにおき給へ。ワキ詞、そも此の衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ詞、悲しや

さりとは

とやあらん
かくやあらん

せんかたも
なみだ

(一)丹後風土記の
歌

迦陵頻伽

な、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に還らんことも叶ふまじ。さりとは返したび給へ。ワキ詞、此の御詞を聞くよりも、いよ／＼白龍力を得、詞もとより此の身は心なき、天の羽衣取隠し、（い）謠叶ふまじとて立ちのけば、シテ謠、今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ謠、地にまた住めば下界なり。シテ謠、とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ謠、白龍衣を返さねば、シテ謠、力及ばず、ワキ謠、せんかたも、（れい）地謠、涙の露の玉鬘、かざしの花もしをく、と、天人の五衰も、目の前に見えて、あさましや。

シテ謠、天（れい）の原、ふりさけみれば霞立つ、雲路まどひてゆくへ知らずも。地謠、棲馴れし、空にいつしかゆく雲の、羨ましき景色かな、迦陵頻伽（れい）のなれ／＼し、聲今更にわづかなる、雁が音

の歸りゆく、天路をきけば懐かしや。千鳥、鷗の沖つ浪、行くか
歸るか春風の空に吹くまで懐かしや。

ワキ詞「いかに申候御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候程
に、衣を返し申さうするにて候。シテ詞「あら嬉しや。こなたへ
賜はり候へ。ワキ詞「しばらく承り及びたる天人の舞樂、唯今
こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ謠「嬉しや、さて
は天上に還らん事を得たり。此のよろこびにとてもさらば、
人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。唯今こ
こにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なく
ては叶ふまじ。さりとはまづ返し給へ。ワキ詞「いや、此の衣
を返しなば、舞曲をなさで其の儘に、天にやあがり給ふべき。
シテ詞「いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。ワキ謠「あらは

疑は人間に
あり天に偽
なきものを

霓裳羽衣の
曲

東遊

久かたのあ
めといつば
(一)伊弉諾、伊弉
册の二尊。
(二)東西南北乾坤
殿長上下。

玉斧の修理



舞の衣羽

の空とは名附けたり、

シテ、サシ謠然るに、月宮殿の有様、玉斧

づかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ謠「少女は衣
を着しつゝ、霓裳羽衣の曲を
なし、ワキ謠「天の羽衣風に和
し、シテ謠「雨に濕ふ花の袖、
ワキ詞「一曲をかなで、シテ謠「舞
ふとかや。地謠「東遊の駿河舞、
此の時や始なるらん。

クリ地謠「それ久かたの天と
いつば、二神出世のいにしへ、
十方世界を定めしに、空はか
ぎりも無ければとて、久かた

(二)春霞たなび
きにけり久方の
月の桂も
花や咲くら
ん(後撰集、
紀貫之)
(二)僧正遍昭の
歌。

たぐひ浪も

玉垣
(三)君が代は天
の羽衣まれに
きて、撫つと
もつきぬ巖な
るらん(拾
遺集、讀人不
知)
撫つとも盡
きぬ巖

の修理とこしなへにして、地謠白衣、黒衣の天人の、數を三五
に分つて、一月夜々のあま少女、奉仕を定め役をなす。シテ謠
「我も數ある天少女、地謠月のかつらの身をわけて、かりに東
の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ^(一)春霞たなびきにけり
久かたの月の桂も花や咲くげに花かづら色めくは、春のし
るしかや面白や天ならで、こゝも妙なり天津風、雲の通ひち
吹閉ちよ。少女の姿しばしとゞまりて、此の松原の春の色を
三保が崎、月清見瀉、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も、松
風も、長閑なる浦の有様。其の上、天地は何を隔てん玉垣の内
外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ謠君が代は、天
の羽衣まれにきて、地謠撫つとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙な
り東歌聲そへて數々の、笙、笛、琴、篋、篋、孤雲の外に充ち満ちて、

蘇命路の山

三五夜中
滿願眞如

(一)愛鷹山。

落日の紅は蘇命路の山をうつして、緑は浪に浮島が、はらふ
嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ謠
「南無歸命月天子、本地大勢至。地謠東遊の舞の曲、シテワカ謠あ
るひは天つみ空の緑の衣、地又は春立つ霞の衣、シテ色香
も妙なり少女の裳裾、地謠左右左、さいう颯々の色をかざし
の天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。キリ地謠東遊の數々に、其
の名も月の宮人は、三五夜中の空に又、滿願眞如の影となり、
御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土に之を施し
給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく
三保の松原、浮島が雲の、あしたか山や富士の高嶺かすかに
なりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。——觀世流謠曲——

五 富嶽の詩神を懷ふ 北村透谷

空を望んで駿驅する日陽、虚に循つて警立する候節、天地の運流、いつを以て極みとはするならん。

飄忽 遺魄

朝に平氏あり、夕に源氏あり、飄忽として去り、飄忽として來る。一潮山を嚙んで一世紀没し、一潮退き盡きて他世紀來る。歴史の載するところ一潮毎に葉數を減じ、古苔むし盡して英雄の遺魄日に寒し。

嗟吁、人生の短期なる、昨日の紅顔今日の白頭、忙々促々として眼前の事に營々たるもの、悠々綽々として千載の事を慮るもの、同じくこれ大暮の同寐、霜は香菊を厭はず、風は幽蘭を容さず、忽ち逝き忽ち消え、邈冥として踪ぬべからざるを致す。

叱咤す

俗眼者流

墳墓何の權かある、宇内を睥睨し、日月を叱咤せし英雄何ぞれぞ墳墓の前に弱兎の如くなる。誰か不朽といふ字を字書の中に置いて、而して世の俗眼者流をして縦に流用せしめたる。嗚呼、墳墓汝の冷々たる舌、汝の常に餓ゑたる口、何者をか嚙まざらん、何物をか吞まざらん。而して墳墓よ、汝も亦遂に空々漠々たり。水流滔々として洋海に趣けども、洋海は終に溢れて大地を包まず、再々として行暮する人世、遂に新なるを知らず、又故なるを知らず。

朽ちざるものいつくにかある。死せざるものいつくにかある。われ答を俟ちて躊躇せり。而して答遂に來らず。朽ちざるに近きものいつくにかある。死せざるに近きものいつくにかある。われ此の答を聞かんがために、過去の半生を逍遙

默思に費せり。而して遂にその一部を聞けりと思ふは非か、
非ならざるか。

天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き駿河なる富士の
高嶺を、天の原振りさけ見れば、渡る日の影も隠ろひ、照
る月の光も見えず、白雲もいゆき憚り、時じくぞ雪は降
りける、語り継ぎいひ継ぎ行かん富士の高嶺は。

(山部赤人)

白雲、黒雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、是等のものを用役し、是等の
ものを使僕し、是等のものを制御して、而して恒久不變の威
靈を保つもの、富嶽よそれ汝か、渡る日の影も隠ろひ、照る月
の光も見えず、晝は晝の威を示し、夜は夜の威を示す、富嶽よ
汝こそ不朽不死に邇きものか、汝が山上の浮雲より早く消

え、汝が山腹の電影よりも速に滅する浮世の英雄何の戯ぞ。
勇ましや汝の山麓を西に馳する風心よや汝の山嶺を東に
飛ぶ風流轉の風汝に迫らず、無常の權汝を襲はず、自由汝と
共にあり、國家汝と共に樹てり、何をか畏れとせん。

遠く望めば美人の如し、近く眺むれば威嚴ある男子なり。
アルプス山の大歐文學に於ける、わが富嶽の大和民族の文
學に於ける、淵源するところ、關聯するところ、豈寡しとせん
や、遠く望んで美人の如く、近く眺めて男子の如きは、そもわ
が文學史の證する所の姿に非ずや、アルプスの崇嚴或は之
を缺かん、然れども富嶽の優美何ぞ大いに讓る所あらん、吾
はこの觀念を以て我が文學を愛す、富嶽を以て女性の山と
せば、我が文學も恐らく女性文學なるべし、雪の衣を被ぎ、白

飄遊す
崛起す

雪の頭巾を冠りたる恒久の佳人吾はその玉容を樂しむ。
盡きず朽ちざる詩神、風に乗り雲に御して東西を飄遊し給へり。富嶽駿河の國に崛起せしといふ朝、彼は幾億萬里の天涯よりその山嶺に急げり而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐り棲みて、遂に復去らず。是より風流の道大いに開け、人鷹、赤人より降つて、西行、芭蕉の徒、この詩神と逍遙せんが爲に、富嶽の周邊を往返して、形なく像なき記念碑を空中に構設し始めたり。詩神去らず。この國なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり。

—透谷全集—

六 人情と詩美

夏目漱石

山路を登りながらかう考へた。

智に動けば角が立つ、情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ、とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると心安い處へ引越したくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れ、畫が出来る。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處をどれ程か寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊にするが故に貴い。

住みにくい世から住みにくい煩を引抜いて、有難い世界をまのあたりに寫すのが詩である。畫である。或は音樂、彫刻である。細かにいへば寫さないでもたまのあたりに見れ

束の間

鏗鏘の音

澆季^{Camera}

ば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら目に映る。たゞおのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清く麗かに収め得れば足りる。此の故に無聲の詩人には一句無く、無色の畫家には尺縑無くとも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩腦を解脱し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

忽ち足下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、何處で鳴いてゐるか影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせとせはしなく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に

蚤に刺されてゐたたまらない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕も無い。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、又鳴きくらさなければ氣が濟まぬと見える。其の上何處までも登つて行く。いつまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて漂うて居る中に、形は消えて無くなつて、たゞ聲だけが空の裡に残るのかも知れない。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體が無くなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼がさめる。雲雀の聲を聞いた時に魂の在所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのでは無い、魂全體で鳴くのだ。魂の活動が聲にあらは

Percy

Bysshe

Shelley

英國の詩人。

(西曆一七九

二一—八二

二)雲雀に寄する

賦。(Ode to the

Skylark)

萬斛の愁

れたものの中で、あれ程元氣のあるものは無い。あゝ愉快だ、かう思つてかう愉快になるのが詩である。

忽ちシエレーの詩を思出して、口の中で覺えた所だけ誦して見たが、覺えてゐる所は二三句しか無かつた。

「前を見ては、後へを見ては、物欲しと憧るゝな。われ腹からの笑といへど、苦みはそこにあるべし。美しき極みの歌に、悲しさの極みの相籠るとぞ知る。」

なる程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思切つて、前後を忘却して、一心不亂に我が喜を歌ふわけには行かない。

西洋の詩は無論のこと、支那の詩にもよく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂はつきものかも知れないが、あの

雲雀を聞く積になれば、微塵の苦みも無い。菜の花を見てもたゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。かく山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦みも起らぬ。

苦みの無いのは何故であらう。たゞ此の景物を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。たゞ此の腹の足しにもならぬ景色が、景色ごしてのみ余が心を樂しませるから、苦勞も心配も伴なはぬのであらう。自然の力はこゝに於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩興に入らしめるのは自然である。

醇乎として

苦しんだり、怒つたり、泣いたりするのは、人の世のつき者だ。余の欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、少時でも塵界を離れた心持になれる時である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居は無い。理非を絶した小説は少からう。何處までも世間を出ることの出来ぬのが其の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、いはゆる詩歌の純粹なものも、此の境を解脱することを知らぬ。嬉しいことに、東洋の詩歌には、そこを解脱したものがあつた。

「採菊東籬下。悠然見南山。」

たゞこれぎりのうちに、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出て来る。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つ

た心持に爲れる。

「獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。」

深林人不知。明月來相照。」

たゞ二十字の中に、優に別乾坤を建立してゐるのである。

—草枕—

別乾坤

七 俳句新調

元日や一系の天子富士の山	鳴雪
はるさめや傘高低にわたし舟	子規
木の間の水春日さすまゝのゆらぎ	碧梧桐
蛇穴を出て見れば周の天下なり	虚子
大和路や雲雀落ちこむ塔の蔭	小波

西瓜太郎躍り出でよと割りてけり
 口あいて佐渡が見ゆると涼みけり
 そよぎかはして若葉が喜べる程の風
 糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな

瓊音
 紅葉
 井泉水
 子規

桑の芽のわづかに青し
 花大根
 子規

桑の芽のわづかに青し
 花大根
 子規

子規筆蹟

早稲は花の曉の露笠涼し
 語草既に盡きぬる夜長かな
 一山にひゞく魚板や秋ゆふべ
 秋の川眞白な石を拾ひけり
 初冬の竹みどりなり詩仙堂

竹冷
 四方太
 繞石
 嗽石
 鳴雪

乞食の門去りあへず柳ちる
 臍をちゝめ肝をちゝめて寒さかな

紅葉
 東洋城

八 世界の四聖 其の一 高山林次郎

生れて一代の宗師となり死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば誰かこれを能くせんや釋迦孔子ソクラテース、基督の四人世呼んで世界の四聖とたゝふるは、宜なるかな。

釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人、其の本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道後の尊號なり。釋迦身は一國の天子に生れけれども、夙に思を人

一代の宗師
 百世の儀表

成道

正覺
巡錫

生の問題に潜め、二十九の歳、其の妻子を捨て、王城を逃れ、山林に隠れて、道を修むること六年、終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして、跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。其の流派を樹て、相争ふ所は、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして、歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦此の間に生れ、其の浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

元々
歸命の大道
木鐸

令聞

老軀を挺す

蕩然として
地を拂ふ

孔子、名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令聞あり。學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢てられて大司空の職に就く。治績大いに舉り、内外其の風采を想望す。時に齊王魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方の遊説を試みぬ。

當時の支那は所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として、地を拂へり。或は臣にして其の君を弑する者あり、或は子にして其の親を害する者あり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。

教化の陵夷

狂瀾を既倒に廻す

老脚蹉跎

下學して而上達す

教化の陵夷、風俗の頹廢、未だ曾て此の時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻さんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず。世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て己むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るもの無からんや。孔子答へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而上達す。吾を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と。後幾ばくもなくして歿す。時に年七十三。

詭辯學派

侃諤

ソクラテースは希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なり。其の生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦孔子と年を隔つる事二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に止り、道德は空文の上へのみ貴ばれたり。其の狀猶釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益する所無かりき。ソクラテースは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻撃して、一步も假借せず。侃諤の正義、其の稀代の雄辯と相伴なひて、一世を風靡せり。

喬木は風に折らる

然るに「喬木は風に折らる」といふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり、其の訴狀に曰く、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を翹め、以て人心を惑亂せり宜しく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテースが此の讒訴に對する抗議は、實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるは無し然れども判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとなし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、曰く、「命のみ」と。

ソクラテースの獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死、靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒

Ascapius
希臘の醫藥の神
謝を致す

ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれんのみ、死又何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや」と終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子、遺言を求む。ソクラテース曰く、「爾一鶏を以てアスケレピアスの神に捧げよ」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならん希臘の聖人ソクラテースはかくの如くにして逝きぬ年七十。

基督は本名を耶蘇といふ。基督とは膏灌^{アツク}がれたる者^(一)といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり猶太のベトレヘム^(二)に生る西曆紀元第一年は其の生後四年目に當れり父はヨセフと呼べり賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生

Pethlehem.

Joseph.

Johannes.

涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして其の福音を傳へたり。

胚胎す

抑當時は羅馬帝國の榮華、正に其の極に達し、禍亂の萌芽の中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日無し、殊に基督の故國なる猶太は、久しく暴君の収斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。是に於て、一世の人心は悉く偉人の現出して人の暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督此の間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然其の偉大なる新教理を宣傳するや、遠近靡然として之に赴く僧侶、學者、官吏等は之を喜ばず、以て猥に新法異説を唱へて民を迷はず

放縱の俗

救世の使命

ものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す基督豫め此の事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、彼等を宥せ、彼等は其の爲すべき所を知らざればなり」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧て曰く、「エルサレムの女子よ、吾が爲に哭くこと勿れ、唯己と己の子との爲に哭け」とかくの如くして、基督は三十三年の短命を以て十字架上の露と消去りぬ。基督の死後、其の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、其の教を天下に弘む基督教即ち是なり。

九 世界の四聖 其の二

以上は四聖の略傳なり、其の人物、事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。四聖の中釋迦を

轅軻不遇

除きては、何れも轅軻不遇の中に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテースと基督とは何れも天下國家の禍福讒奸の手に罹り、或は毒を押し、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。慘憺たりと謂ふべし。然れども是等の人々の志す所は天下後世に在り、現世の禍福と一身の安危とは毫も其の顧慮する所にあらず。故に其の死に就くや、晏如として猶歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却つて「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、「正義を信ずるものにとりて、死はた何爲るものぞ、吾をして一日の生

浩大無邊

あらしめんか、其の一日即ち國民の迷をさまさるべからず。と、基督は己を罪に陥るゝものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。四聖は其の生れたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差違無きを得ず。今其の要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始りて苦に終る。生老病死、孰れか苦に非ざるべき。故に吾人は現在を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾に在り、情慾の原因は「我」の一念に執着するに在り。故に吾人は「我」の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。是人生究竟の樂地にして、涅槃即ち是な

我
執着の心
今身保つて
此世風を
九事一集
保つて

コレが世界
九 世界の四聖 其の二
了んじつに
心か
利慾心
ト云ふ
動ルル

後天

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにするに在り、而して身を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生れながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、之を完うすること能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて身既に修らば、家自ら齊ふべく、家齊は、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

知徳合一

ソクラテースの教は所謂知徳合一説なり。思へらく、眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。

垂訓

知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となさば、正義おのづから其の中に在り。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。然れども富貴は道德の中に在り。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。曰く、心の貧しきものは福なるかな、天國は其の人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、其の人は飽

何ぞ己が目
にある梁木
を見ざる

くことを得べければなり。憐むものは福なるかな。其の人は
憐を得べければなり。心の清きものは福なるかな。其の人は
神を見るべければなり。惡に敵すること勿れ。人若し汝の右
の頬を打たば、左の頬をも轉らして之に向けよ。汝の隣人を
慈しみて汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義を其の前
に行ふこと勿れ。右の手に爲す所を左の手に知らしむるこ
と勿れ。偽善者の行に倣ふこと勿れ。隠れたるを鑑給ふ神は、
顯に報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふるこ
と能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見なが
ら、何ぞ己が目にある梁木うづほを見ざる。汝等求めよ、然らば與へ
られん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門よ
り入れ。沈淪に至る路は濶く、其の門は大きく、之より入るも

のは多し。嗚呼、いかに生命に至る路は窄く、其の門は小さく、
之を得るものの少きぞや。凡そ此の訓を聽きて行ふ者は、磐
の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は、沙上
に屋を架せる愚人の如し。と、基督教の精髓は、後世の人如何
なる色彩を加ふとも、畢竟此の山上の垂訓を出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖
逝いて既に幾千年ぞ。而して此の教の今なほ凛々として生
氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、此の教に憑りて
其の道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の
永遠の救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大なること何
を以てか之に比せんや。

— 樗牛全集 —

一〇 千里が竹 其の一

近松門左衛門

(一) 鄭芝龍と其の子鄭成功。

(二) 明朝の將軍。後、鞏毅に内應して明帝を弑す。
(三) 明朝の忠臣。司馬大將軍。

(四) 明の嘉宗の年號。(二二八五)
(五) 錦祥女。

船路の末も知らぬ火の、筑紫は雲に埋めども、あとに應護の神風や、千波萬波を押切つて、時もたがへず親子の船、唐土の地に着きにけり、鄭芝龍一官は、故郷に歸る唐錦、裝束引きかへ妻子に向ひ、我が本國といひながら、時遷り代變り、天下悉く李蹈天が引入れにて、鞏靫夷の奴となり、昔の朋友、一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が、生死の様子も知れざれば、何を以て義兵の旗を擧げ、何處を一城に立籠るべき處もなし、然るに、某去んぬる天啓五年、此の國を立退き、日本へ渡る時二歳になりし娘の子を、乳母の袖に捨置きしが、其の子が母は産落して當座に死す、かくいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木

(一) 明の將軍。鞏毅に降りしが、幾千ならすして鄭芝龍に應ぜり。

(二) 支那江西省九江府。
(三) 支那湖北省武昌府嘉魚縣。
(四) 宋の詩人蘇東坡。

の、雨露の恵に長ずる如く天地の父母の助にや、成人して今吳將軍甘輝といふ大名一城の主の妻となれる由、商人の便に聞及ぶ、頼む方はこればかり、親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、鞏の甘輝も易々と頼まるべし、これより道の程百八十里、打連れては人も怪しめん、われ一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと、頓智を以て人家に憩ひ、おつつくべし、これよりさきは、音に聞ゆる千里が竹とて、虎の栖む大藪あり、それを過ぐれば、潯陽の江、これ猩々の栖む處、風景聳えし高山は、赤壁とて、昔東坡が配所ぞや、それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし、其の赤壁にて待揃へ、萬事を牒し合すべし、と、方角とても白雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。

たづきも知らぬ

ほうと我をぬかし

教に任せ和藤内、人家を求め忍ばんと、かひなくしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざし瀧つ波、とび越えて跳越え、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里絶えて廣々たる、千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうと我をぬかし、「なう母じや人。此の脛骨に覺えたり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふ事か、行けば行く程藪の中。むう、分つたり方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴。」と、根笹、大竹押分け蹈分け、尙奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲、攻鼓、攻太鼓、喇叭、ちやるめら、高音をそらし、ひやうくとこそ聞えけれ。「すは、我々を見咎めて、敵の取巻く攻太鼓か、又は狐のなすわざか。」と、茫然たる其の折ふし、空凄じく風起り、砂を穿ち、どう

どうどう、竹葉さつと卷立て、卷立て、吹折る竹は劍の如く、凄じなんどもおろかなり。

讀めたり讀めたり
(一) 虎嘯而谷風至。龍舉而景雲屬。淮南子。晉の人。十四歳の少年の時赤手虎を搏して父の厄を救ふ。

和藤内ちつとも臆せず、讀めたりと、さては異國の虎狩な。あの鐘太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が原、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は、孝行の徳に因つて、自然と逃れし悪虎の難。其の孝行には劣るとも、忠義に勇むわが勇力、唐へ渡つて力はじめ、神力ますく、日本力、双で向ふは大人氣なし。虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎ。と、尻ひつからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も、畏れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹く風と、共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面をすりつけ、すりつけ、岩角に爪磨きたて、二人を目がけい

いがみ懸る

がみ懸るを事ともせず、弓手に擲り、馬手に受け、振つて懸れば、身をかはし、撓めばひらりと乗移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえい／＼えい、虎の怒り毛、怒り聲、山も

崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛を筆られ、両方共に息つかれ、石上に突つたてば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたる其の響、響、吹くが如くなり。

母藪蔭より走り出で、やあ／＼和藤内、神國に生れて、神より受けし身體髮膚、畜類に出合ひ、力立して怪我するな。日本の地は離るゝとも、神はわが身にいすゝ川大神宮の御祓納受など



近松門正衛門

身體髮膚

とじり／＼

か無からんや。と、肌の護符を渡さるれば、げに尤も。と押戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神秘の其の不思議、猛りに猛る威勢も、忽ち尾を伏せ、耳を垂れ、じり／＼と四足を縮め、恐れわな／＼き岩洞に匿れ入る、尾筒を攫んで跳返し、打伏せ、打伏せ、ひるむところを乗つか／＼り、足下にしつかとふまへしは、天の斑駒、素戔鳴尊の神力、天照す神の威徳ぞ有難き。

一一 千里が竹 其の二

かゝる所に勢子の者群り来る、其の中に、大將と覺しき者大音、擧げ、やあ／＼、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる、其の虎は忝くも、主君右軍將李、踏天より、韃靼王へ献上のため、狩出したる虎なるぞ、早々渡せ、異議に及ば、打殺さん。

風來人

笑壺に入る
ほざく

いつかなこ
と

しやぐわん、しやぐわん」とわめきけり。李踏天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、「やあ、餓鬼も人数、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さほど欲しがらる虎ならば、主君と頼む李踏天とやら、石花菜とやら、こゝへ突出し詫言させいぢきに逢うて用もある。さもない内はいつかなことならぬ、ならぬ」とねめつくる。「やあ、物ないはせそ、討取れ。」と一度に劔をはらりと抜く。「心得たり。」と護符を虎の首にかけ、母の側に引据うれば、繋ぎし如くに働かず。「おゝ心安し。」と太刀差翳し、群る中へ割つて入り、八方無盡に割立て割立て、撫でまくる。

勢子の大将安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と、一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加つて、

むつくと起きて身慄し、敵に向ひ齒を鳴し、猛り唸りて飛懸る。「こはかなはじ。」と安大人、勢子の者が差いたる劔、かり鉾、數槍、手に當るを幸に、投附け投附け打ちかくる。虎は神力自在を得、劔を宙に引つくはへ引つくはへ、岩に打當て微塵になす。双の光、玉散る霰、氷を碎くに異ならず。打物盡くれば、官人ども、色めき立つて迷惑ふ。後より和藤内、「どつこい遣らぬ。」と顯れ出で、安大人が素首を搦んで差上げ、くるくると振廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。

此の勢に官人ばら、後へ戻れば、悪虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立に突立つたり。「あゝ、申し御堪忍。御免々々。」と手を合せ、土に喰ひつき泣きゐたり。和藤内、虎の脊を撫で、「うぬらが

仁王立

小國として侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。とつめかくる。なう、何の否で御座りませう。韃靼王に從ふも、李蹈天に從ふも命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情頼み奉る。と、地に鼻つけて畏る。

出かした

「お、出かした、出かした。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添の小刀はづさせ、是も當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端剃るやらこ

はらけ髪



ばつやら、絲鬚、厚鬚、剃刀次第、瞬く隙に剃りしまひ、二擲半の

國姓爺合戦正本挿圖

はらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を見合せて、頭冷つく風引いて、噓々、村雨々々、と、涙を流すぞ道理なる。親子どつと打笑ひ、揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて何左衛門、何兵衛、太郎、次郎、十郎まで、面々が國所頭字に名乗り、二行に立つてばつたてろ。「承り候」と、お先手の手振の衆、ちやぐちやう左衛門、

東蒲塞右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、白城次郎、ちやる

なん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉九郎、もうる左衛門、じゃが太郎兵衛、さんとめ八郎、英吉利兵衛、今參のお供先、跡に引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名を取る、口取る、國を取る、響は異國、本朝に、踏跨げたる鞍鐙、虎の脊中に打乗つて、威勢を千里に顯せり。 — 國姓爺合戦 —

一一 儒の道をわらふ 本居宣長

論語

論語に、厩焚。子退朝曰、傷人乎。不問馬。これ甚だいかななり。すべて人の家の焚けんにも、人はさしも焼かるゝものにあらず。馬はよく焼かるゝものなり。まして馬屋の焼けんには、人は危きこと無し。馬こそいと危けれ。されば馬をこそ問ふ。

(一)孔子。

まなびの子

べけれ。これ人情なり。然るにまづ人を問ふすらいかななるに、馬を問はざるはいと心無き人なり。但し人を問へるはさることなれば記しもすべきを、馬を問はぬが何のよきことかある。これまなびの子どもの、孔丘が常人に異なることを人に知らさんとする餘りに、かへりて孔子が不情をあらはせり。不問馬の三字を削りてよろし。

雪螢を集めて書讀みける唐土のふること。

もろこしの國に、むかし孫康といひける人は、いたく學問を好みけるに、家貧しくして、油をえ買はざりければ、夜は雪の光にて書を読みつ。又同じ國に車胤といひける人も、いたく書讀むことを好みけるを、これも同じやうにいと貧しく、油をえ得ざりければ、夏の頃は、螢を多く集めてなん讀み

ものす

はつく

ける。此の二つの故事は、いとく名高くして、知らぬ人無く、歌にさへなん多く詠むことなりける。今思ふに、これらも彼の國人の例の名を貪りたる作り事にぞありける。其の故は、若し油を得ずば、夜々は近となりなどの家にもものして、其のともし火の光を乞ひかりても、書は讀むべし。たとひ其のあかり心にまかせず、はつくなりとも、雪螢にはこよなく勝りたるべし。又年の中に雪螢のあるはしばしの程なるに、それが無き程は、夜は書讀までありけるにや、いとをかし。

富貴を願はざるをよき事にする論

世々の儒者、身の貧しく賤しきを憂へず、富み榮ゆるを願はず喜ばざるをよき事にすれども、之は人の眞の情に非ず。多くは名を貪る例の偽なり。希々にさる心ならん者ありと

ひがもの

も、そは世の僻者にこそあれ、何のよき事ならん。理ならぬふるまひして、あながちに願はんこそは悪しからぬ。ほどに勤むべき業をいそしく勤めて、なりのぼり、富み榮えんこそ、父母にも祖先にも孝行な



本居宣長

らめ。身衰へ家貧しからんは、上なき不孝にこそ有りけれ。たゝおのが潔き名を貪る餘りに、眞の孝を忘るゝも、亦もろこし人の常なりかし。

儒者の皇國の事をば知らずとてある事

儒者に皇國の事を問ふに、知らずといひて耻とせず。から國の事を問ふに、知らずといふをばいたく耻と思ひて、知ら

からめかす

ぬ事をも知顔にいひまぎらはす。こはよろづをからめかさ
んとする餘り、其の身をも漢人めかして、皇國をばよその國
のごともてなさんとするなるべし。されど、なほから人には
あらず、御國人なるに、儒者とあらん者のおのが國の事知ら
であるべきわざかは。但し皇國の人に對ひては、さあらんも
から人めきてよかんめれど、若し漢國人の間ひたらんには、
我はそなたの國の事はよく知れれども、我が國の事は知ら
ずとは、さすがにえ言ひたらじをや。若しさもいひたらんに
は、己が國の事をだにえ知らぬ儒者の、いかでか人の國の事
をば知るべきとて、かれ手を拍ちていたく笑ひつべし。

—玉がつま—

一三 國 學

平 田 篤 胤

學問は色々ある。其の中に何の學問がいつち大きいぞと
いふに、ちと自分勝手のやうなれども、皇國即ち我が國の學
問ほど、大きい物は無いでござる。なぜといふに、まづ近く儒
學と佛學との上で申さば、儒者は最初四書五經とか、十三經
とかいふ類の書物を讀むことを覚え、又左國史漢といつて、
左傳といふもの、國語といふもの、史記といふもの、漢書とい
ふものなどを粗々讀んで、さて漢文を綴る方を覺えたり、其
のふだんの口ずさみに、詩を作ることでも覺えると、もう儒
者といつて通られるが、何のこれしきの書物を讀んで、これ
しきの事を覺ゆるに、さして難いことは、ありや致さんでこ
ざる。大方世間の儒者は、皆此の位なものでござる。

おもと

さて其の儒者に比べては、出家の方がよつほど廣い。なぜといふに、己が是非讀まねばならぬと極めた俗にいふ經文が五千餘卷、馬に付けたならば、七八駄あらう。それをみんな讀まず、十分の一を讀んだ所が、ざつと儒者がおもと讀まねばならぬ書物の、一倍もあるてござる。そのみならず、儒者は佛書を讀まんでも、事が缺けぬによつて、とんと讀まず。たまさか佛書を讀む儒者もあれど、そりや百人に一人も無い。僧徒はそれと事ははり、儒者のおもと見る書物をば、子供の時から文字を知る爲に讀んで置く。又詩も漢文も儒者と同じやうに作りもする。そこで僧徒の學問は儒者よりは廣いでござる。

さて皇國の學問がいつち廣いといふ故は、右申す通り、儒

八紘九野

天漢

春秋命歴
序考をへか
しきりをか
しのかしに
けしのかし
道のけしに
めかめか
の得めか
きの初め
初本め
篤ける
嵐る開

學、佛學を始め、種々さまざまの學問があつて、其の道々のころと事とが、盡く皇國の學び事に混雜して、譬へば彼の八紘九野の水、天漢の流、これに注がずといふこと無しといふ如くでござる。其の通り入混つてある故に、人の心もそれに



平田篤胤筆蹟

従つて移り、いづれを是とも、いづれを非とも別ちかねて、言はゞまごつて居ることが多くある。それ故に、其の混雜をつぶさに分けねば、眞の道の有難き所も顯れず、其の混雜をより分けて、眞の道の害となることをいひ顯さうとするに ついては、よく先方の事をも知らねばならず、彼の唐人蘇子

由といふ者の善與人言者。因其人之言。而爲之言。則天下之辯者服矣。云々」と申したる如く、此方の事ばかり言つたのではいかず、例へば僧徒を諭すには佛書で言ふと、ぎうの音も出ず。儒者を諭すには儒書で論ずれば、猫に逐はれた鼠のやうにかしこまる。されば皇國の純らと正しい道を得ようとするには、それに心得なくては叶はぬ事でござる。殊にもろもろの學問の道、たとひ外國の事にしろ、皇國人が學ぶからは、其のよき事を選んで、皇國の用にせうとのことでござる。さすれば、實は漢土は勿論、天竺、阿蘭陀の學問をもすべて皇國學びといつても、違はぬ程のこと、即ちこれが皇國人にして、外國の事を學ぶ者の心得でござる。

—古道大意—

一四 方丈記 其の一 鴨 長 明

うたかた

棟をならべ
藁を争ふ

ゆく川の流は絶えずしてしかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつむすびて、久しく止ることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。

玉敷の都の中に棟をならべ藁を争へる、高き卑しき人のすまひは、代々を経てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれに同じ所もかはらず人も多かれど、いにしへ見し人は二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死し夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

無常を争ひ去る

知らず、生れ死ぬる人、いつ方より來りていつ方へか去る。又知らず、かりのやどり誰が爲に心をなやまし、何によりてか目をよろこばしむる。其の主人と住家と無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて花残り、残るといへども、朝日に枯れぬ。あるは花しほみて露なほ消えず消えずといへども、夕を待つことなし。

およそもの心を知れりしよりこのかた、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やゝたびゝになりぬ。

(一)高倉天皇の御代。(一八三七)

去にし安元三年四月二十八日かとよ、風はげしく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來て、いぬるに至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省ま

とかく

現心

公卿

で移りて、一夜がほどに塵灰となりにき。火もとは樋口富の小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けるとなん。吹迷ふ風にとかく移りゆくほどに、扇をひろげたるが如く末廣になりぬ。遠き家は煙に咽び、近きあたりはひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹立てたれば、火の光に映じてあまねく紅なる中に、風に堪へず、吹切られたる焰飛ぶが如くにして、一二町を越えつゝ、うつり行く。其の中の人、現心あらんや。或は煙に咽びて仆れ伏し、或は焰にまぐれて忽ちに死にぬ。あるは又纔かに身ひとつからくして遁れたれども、資財を取出づるに及ばず。七珍萬寶ながら灰燼となりにき。其の費いくばくぞ。此度公卿の家十六焼けたり。まして其の外は數を知らず。すべて都の中、三分一に及べりとぞ。男女

あぢきなし
(一)高倉天皇の御代。(一八四〇)

死ぬる者數千人、馬牛の類邊際を知らず、人のいとなみ皆おろかなる中に、さしも危き京中の家を作るとて、寶を費し心を悩ます事はすぐれてあぢきなくぞ侍るべき。

また治承四年卯月二十九日の頃、中の御門、京極の程より大きなる辻風起りて、六條わたりまで、いかめしく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくる間に、其の中に籠れる家ども、大きなるも、小さきも、一つとして破れざるはなし。さながらひらに倒れたるもあり、桁柱ばかり残れるもあり。また門の上を吹放ちて四五町が外に置き、また垣を吹拂ひて、隣と一つになせり。況や家の内のたから敷を盡して空にあがり、檜皮葺板類冬の木の葉の風に亂るゝが如し。塵を煙の如く吹立てたればすべて目も見えず。おびたゝしく鳴り

業風

(一)安徳天皇の御代。(一八四二)

どよむ音に、ものいふ聲も聞えず、かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。

また養和の頃かとよ、久しくなりてたしかに覺えず、二年が間飢渴してあさましき事侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風大水など、よからぬことども打續きて、五穀ことごとくみのらず、空しく春耕し、夏植うるいとなみのみありて、秋刈り冬収むるぞめきはなし。

これによりて國々の民、あるは地を捨て、境を出で、あるは家を忘れて山に住む。さまゝの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更に其の効なし。

京のならひ、何わざにつけても、源は田舎をこそたのめるに、絶えてのぼる者なければ、さのみやは、みさをもつくりあ

さのみやは
みさをもつ
くりあへん

なべてならぬ

ぞめき

へん。念じわびつゝ、さまざまの寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目見たつる人もなし。たま〜かふるものは金を軽くし、粟を重くす。乞食道のべに多く、憂へ悲しむ聲耳に満てり。さきの年かくの如く、からくして暮れぬ。あくる年は立直るべきかと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まさるやうに跡かたなし。

あまさへ

一五 方丈記 其の二

二 わづらひ

すべて世のありにくきこと、わが身と棲家とのはかなくあだなるさまかくの如し。況や所により身のほどに隨ひて、心をなやますこと、あげて數ふべからず。

ありにくきこと

すぼき

念々に動き

もしおのづから身數ならずして、權門の傍に居る者は、深く悦ぶ事はあれども、大いに樂しむに能はず。歎ある時も、聲をあげて泣くことなし。進退安からず、立居につけて恐れ戦く。例へば雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし貧しくして富める家の隣に居るものは、朝夕すぼき姿を耻ぢて、諛ひつゝ出で入る。妻子僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家の人のないがしろなる氣色を聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。もし狭き地に居れば、近く炎上する時其の害を遁るゝことなし。もし邊地にあれば、徃反煩多く、盜賊の難離れがたし。勢あるものは貪慾深く、ひとり身なるものは人に輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧しければなげき切なり。人をたのめば身他の奴となり、人をはこくめば心思愛につ

たまゆらも

(一)住みわびて
我さへ軒の忍
ぶ草しの忍
かたがたしげ
き宿かなしげ
(金葉集 周防
内侍)

たづきなし

かはる。世に従へば身くるし。又従はねば狂へるに似たり。いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、しばしも此の身をやどし、たまゆらも心をなくさむべき。
わが身父方の祖母の家を傳へて、久しくかの所に住む。その後縁かけ身衰へて、忍ぶ方々しげかりしかば、遂に跡とむる事を得ずして、三十餘にして更に我が心と一つの庵を結ぶ。これをありしすまひになずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりを構へて、はかしくは屋を造るに及ばず。僅かに築地をつけりといへども、門たつるにたづきなし。竹を柱として、車宿りとせり。雪降り、風吹く毎に危からずしもあらず。所は河原近ければ、水の難深く、白波の恐も騒がし。すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心をなやませることは、

よすが

(一)亦猶下行人之
造旅宿老蠶
之成中獨繭上
矣。其住幾時
乎。(廢滋保
胤、池亭記)

三十餘年なり。其の間折々のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち五十の春を迎へて家を出で、世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめん。空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をか經ぬる。

一六 方丈記 其の三

三 閑居

こゝに六十の露消えがたに及びて、さらに末葉のやどりを結べることあり。いはゞ旅人の一夜の宿を造り、老いたる蠶の繭を營むが如し。これを中頃のすみかになずらふれば、又百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々に傾き、

住家は折々に狭し。其の家の有様世の常にも似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居を組み、打覆を葺きて、繼目毎に掛がねをかけたなり。もし心に適はぬことあらば、易く外に移さんが爲なり。其の改め造る時幾ばくの煩がある。積む所僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に他の用途いらす。

(一)山城國宇治郡。木幡山の東北。

關伽棚

眉間の光
普賢

(二)六卷。源信僧郷の著

いま日野山(一)の奥に迹をかくして後、南にかりの日がくしをさし出して、竹の簀子(二)を敷き、其の西に關伽棚(三)を作り、うちには西の垣に沿へて、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を掛けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。即ち和歌管絃(二)、往生要集如きの抄物を入れたり。傍

つかなみ

に箏、琵琶おの／＼一張を立つ。いはゆる折箏、つぎ琵琶これなり。東に沿へて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓を開けて、こゝに文机をいだせり。枕のか



鴨長明像

たにすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占めて、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。即ちもろ／＼の藥草を植ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

其の處のさまをいは、南に笕あり、岩を疊みて水を溜めたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら迹を埋めり。谷しげけれど西は晴れたり、

紫雲

罪障

(一)世の中を何
 ぼらけへん朝
 のゆけのあと
 のしらなみ。
 (二)拾遺集、沙彌
 (三)山城國紀伊
 郡、宇治川の
 東岸。
 (四)沙彌、滿善の元
 正天皇の時の
 人。
 (五)潯陽江頭夜
 送客楓葉秋
 花秋愁、白樂
 天、琵琶行。
 (六)住大納言源經
 信。琵琶の名
 手。嘉保元年
 (一七五四)太
 宰權帥に任ぜ
 らる。都督は
 太宰帥を唐風
 に呼ぶ。

觀念のたより無きにしもあらず。春は藤浪を見る、紫雲の如
 くにして西の方にほふ。夏は子規を聞く、かたらふ毎に死
 出の山路を契る。秋は日ぐらしの聲耳に満てり、空蟬の世を
 悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む、つもり消ゆるさま罪障に喩
 へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづか
 ら休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また耻づべき友も
 なし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業をを
 さめつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なけれ
 ば何につけてか破らん。もし迹の白浪に身を寄するあした
 には、岡の屋に行きかふ船を眺めて、滿沙彌が風情をぬすみ、
 もし桂の風葉を鳴す夕には、潯陽の江を想ひやりて、源都督
 のながれをならふ。若し餘りの興あれば、しばし松の響に

(一)共に琵琶の
 名曲。

あからさま

やんごとな
 き人

がうな

秋風の樂をたくへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ
 拙けれども、人の耳を喜ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、
 ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。
 大かた此の處に住みそめし時は、あからさまと思ひしか
 ど、今己に五とせを経たり。假の庵も稍ふる屋となりて、軒に
 は朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便に都の様
 を聞けば、此の山に籠り居て後、やんごとなき人のかくれ給
 へるもあまた聞ゆ。まして其の數ならぬたくひ、つくしてこ
 れを知るべからず。度々の炎上に亡びたる家又いくそばく
 ぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。
 程せばしといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり、一身を
 宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知

るによりてなり。みさこは荒磯に居る即ち人を恐るゝが故なり。われ亦かくの如し。身を知り世を知れゝば、願はず、まじらはず、たゞ静かなるを望とし、愁なきを樂みとす。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば牛馬、七珍もよしなく、宮殿、樓閣も望なし。今さびしき住居一間の庵、みづから之を愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることを耻づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に着することをあはれぶ。

もし人このいへる事を疑はゞ、魚鳥のありさまを見よ。魚は水にあかず、魚にあらざれば其の心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざれば其の心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさたらん。

餘算山の端に近し

そも、一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽ちに三途の闇に向はん時、何のわざをかこたんとする。佛の人を教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今草の庵を愛するもとがとす。閑寂に着するも障なるべし。いかが用なき樂みをのべて、空しくあたら時を過さん。

しづかなる曉、此のことわりを思ひつゝ、けて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心ををさめて道を行はんが爲なり。然るを汝の姿は、聖に似て、心は濁にしめり。住家はすなはち淨名居士の跡をけがせりといへども、保つ所は僅かに周利槃特が行にだも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづからなやますか、はたまた安心の至りてくるはせるか、其の時心更に答ふることなし。たゞ傍に舌根をや

(一)維摩詰のこ
と、方一丈の
室に起居す。
(二)釋迦の弟子。
魯鈍なり。
舌根をやと
ふ

不請の念佛
(一)順徳天皇の御代。(一七八七)
(二)作者鴨長明の法名。
(三)新勅撰和歌集に作者源季廣として此の歌をなす。

渤海之東。
(四)渤海之東。里不知幾億萬焉。實惟無底之谷。其下歸墟。名曰八紘九野。流莫不天漢注之。而無子。無減焉。

とひて、不請の念佛兩三遍を申してやみぬ。時に建曆二年三月の晦日ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれを記す。
月影は入る山のはもつらかりき
たえぬ光を見るよしもがな。 — 方丈記 —

一七 澄の江の浦

坪内逍遙

それ渤海の東方に、
底ひ知れざる壑あるを、
名づけて歸墟といふとかや。
八紘九野の水盡し、
空に溢るゝ天の河、
流の限り注げども、

無増無減と唐土の、
至人が寓言今こゝに、

見る目はるけきわたの原。

北を望めば蒼茫と、

八重の潮路は霞籠め、

蓬が島にや通ふらん。

西を見やれば千里の波、

浩蕩としてきはまりなく、

旦に洗ふ高麗の岸、

夕陽も其處に夜の殿。

(一)蓬萊の島。渤海之東有蓬萊山。俗傳有五洲。蓬萊也。
(二)列子。

(一)列子。名は無増無減。

三、新子劇
後、行者
四、パエケエ下
五、見景劇
六、見景劇

渤海之東。
里不知幾億萬
焉。實惟無底
之谷。其下歸
墟。名曰八紘
九野。流莫不
天漢注之。而
無子。無減焉。

(一)丹後國竹野郡。謂はゆる浦島子の故郷。

錦繡の帳暮れゆけば、
むらさき匂ふ空の色
なかに驚く早紅葉の。
頻に墜ちて癩する山、
秋老けぬれば欸乃を、
絡りて渡る雁が音に、
氣も澄の江の浦の波、
幾代の調や疊むらん。

—新曲浦島—

(二)Tac Leman, ベネ湖の佛蘭西名(路西、佛蘭西兩國に跨る大湖)。

レマンの湖を後にした汽車は、何時とはなく粗く嶮しい

柳澤 健

一八 アルプを越えつゝ其の一

風景の中にはいつて行くもうアルプの山地にかゝつたのである。

シオンの町といふのは、かうした山地の中に廢れた古城と共に寂しく横たはつてゐる所である。今まで自分たちの乗つてゐる車を牽いて來た機關車は、こゝで電車に代へられた。

嶮しい連峯が立塞がるやうに、行手を限つてゐるのである。風はやゝ冷たく車窓のなかに吹きこんで來た。空は曇りがちではあつたが、所々に碧い眼のやうな優しい色が覗いてゐた。それはもうわが伊太利の空に外ならないのであつた。

シオンの町を出た汽車は、溪間に沿うて流れる清らかな

(一)Sion 瑞士にあり。

川と並んで、次第々々に高く登つて行く。其の左右に聳え立つてゐる山々は、或時には峻しい岩ばかりから成つてゐることもあり、また或時には生繁つた杉の密樹ばかりから成つてゐることもあつた。しかし其のいつれの山も其の頂を見上げると、其處には眞白な雪の燦きと、灰色の雲の動きとがあつた。

かうした山の麓には、いづれも葡萄の樹が植ゑてあるのであつた。焼けたやうな粗々しい砂礫の土地の上に、両手でつかめるぐらゐの小さな樹が、僅かな緑の葉をつけてゐるのを見るのは、痛々しいと共に、勇ましい感じをも誘ひ起させられる。其の感じは、此の樹の上にはばかりではなく、それを作る人の上にも、また馳せて行くのであつた。其の人たちは、

此の粗貧な畑のあちこちに、木造の粗末な建物を立て、住つてゐた。其の建物の木ばかりで出来てゐること、其の窓取や屋根の具合、わけて屋根の庇が長く出てゐる様子などは、日本の山地などで見るものと、さして違つてゐるところがなかつた。薄い煙が其の建物の屋根にまつはつてゐるのも、自分たちに遠い故郷の姿を想ひ出させないではおかなかつた。

葡萄畑が盡きてしまつて、ほんの石ばかりの山地に来て、やはりあちこちに人家が散ばつてゐた所々には、廢れた城の跡らしい赭土色の壁や、崩れ落ちてゐる石の橋などが見えたりした。

「あんな所にも人生がある。」

と、自分は旅に出てよく味はふ感じを、又してもこゝで繰返さずにはゐられないのであつた。それと共に、かうした城や橋や人家が、まだ廢れなかつた古い昔のことを、——言ふまでもなく、自分の足や馬の背で此の山を越さねばならなかつた古い昔のことを、——ハンニバルの大軍の越えて來た當時のことを、ナポレオンの大軍の越えた當時のことを、さてはラブレト^(一)が、スタンダールが、ゲーテが、スタール夫人が越えて來た當時のことを、今更に感慨深く想ひ浮べぬわけには行かなかつた。自分は幻を眼の前に見るやうに、一度にそれ等の古い「物語」を、それ等の形を留めない城や橋の上に見たのであつた。

それにしても、かうした風に車中に安坐して、古い「物語」を

Jean de La
Trivere.
佛蘭西の著作家(西曆一六九四—一七六六)
Stendhal.
本名は Marie-
Henri Boyle.
佛蘭西の小説家(西曆一七八三—一八四二)
Madame de
Staël.
佛蘭西の小説家(西曆一七六六—一八一七)

Alfred Victor
de Vigny.
佛蘭西の詩人(西曆一七九三—一八六三)
[「ラ・メラン」
ド・セルジエ]
(牧人の家)

易々と讀みながら、苦もなくアルプの嶮嶺を越え得られる今日の自分を、幸なものとして欣んでいゝのであらうか。ふと其の思に打れた自分の胸に、曾て讀んだことのある十九世紀の初の佛蘭西の詩人アルフレット・ド・ヴィニイ^(一)の詩の一節が、浮ぶともなく浮んで來た、其の詩の意は、

「小徑に沿うてさゝやかな歩を運ぶ詩人にとつては、鐵道といふものは、絶対に急を要する場合の外は、許されな

いものである。例へば、親しい友が自分に救を求めてゐる時、祖國が我々に防禦をば求めてゐる時、さては科學上の集會に招かれてゐる時、又は死の床にある母上が、吾を呼んでゐる時、——これ等を外にしては、ゆめ機關車などにたよつてはならないのである……旅にある詩人は、あら

事象

ゆるる事象の上に、其の長い眼尖をば、流れ注ぐ大河の如くに注ぎ込みながら、其のあらゆるものを顛へる心もて問ひ質ねることをしなければならぬ。そして首傾けつゝ、歩いては立ちどまり、立ちどまつてはまた歩み出すといふやうにしなければならぬ。

かういふのである。實に旅を以て心の夢の上をさまよふ一つの方法であるとのみ解して行かうとする詩人にとつては、此の鐵路の上を惶しく馳驅して行く機關車といふものは、たゞ動搖と雜沓とを心の上に持來す外には、他に與へるところのないものであると言つて宜しいのであらう。自分も亦心と眼とを以て、自然の中をおもむろに歩いて行かうとする熱望に於ては、さしてヴィニーにも劣らうとは思

[Nostalgia
(郷愁)]

旅を旅する

[Lombardia
伊太利の北部
地方。]

はないが、限りある月日と、限りないノスタルジヤの念との間にあつて、どうして其の詩の意のまゝに、首傾けつゝ、歩いては立ちどまり、立ちどまつてはまた歩み出す旅を旅することが出来よう。

嗚呼、それにしても

「あの嶺一つさへ越せばもう伊太利だ。伊太利だ。ロンバルヂヤの野だ。」といふ喜に溢れた聲と共に、幾日かのアルプの嶮しい旅をふりかへつて、覺えず溜息をもらしてゐる古い世の旅人の姿を心のなかに描き出すと、やはりかうして車窓にもたれたまゝ、事無く數時間のうちには其の伊太利の土地に着いてしまふ自分たちをば、仕合な世に生れた者であるとなすことは出来ないであつた。

清らかな溪流はまだ下を流れてゐる綺麗な白い砂が其の流を透して、涼しく眼に映る。素足で此の流を歩いて見たいといふやうな望が、——わけて靴を日夜足から離し得ない歐羅巴の生活を續けて來た自分たちの心をば、強く刺すのであつた。其の流に釣をしてゐる男、其の流に沿うた白い道をとぼく、歩いて行く男、其の道の両側にずっと並んで、微風にかざやいてゐる白楊樹の並木。

一九 アルプを越えつゝ、其の二

Troca

トーチエ(一)の清らかな流を見ながら汽車の馳けゆく道は、刻々と低くなつて行く。展望は益擴つて行き、後方の雪山は愈遠ざかつて行く。

Lago Maggiore
伊太利、瑞西に跨がる湖。

別墅
Yacht
(快走船)

Talle
伊太利にあ
り。瑞西との
國境附近。

うとく、するともなしに暫く眼を閉ぢてゐた自分は、隣席のO氏から急に呼起されて眼を開くと、——ほう、それこそ眼の覺めるやうに爽やかで美しい景色が、車窓に映つてゐた。大湖(二)である碧玉のやうに澄んだ青い水、其の水を圍む繁樹の數々、其の濃い緑の樹葉のあちこちに點綴する花、其の花に充ちた緑の中に、夢のやうに優しくうづもつてゐる綺麗な別墅の數々、そして其の水の中の小島、白楊(三)、ヨット、白鳥……、今まで粗い巖から成つてゐる風景のみに親しんでゐた眼は、忽如と現れたこの魅力をもつた湖水のために、軽い眩惑さへも感ずる程であつた。

爽やかな緑と、かくはしい花の匂を交へた微風とが、車室の中にも感じられた。イゼルレ(三)で味はふことの出來なかつ

た全く別の伊太利が其處にあつた自分はふたたび心のなかで微笑みながら、イゼルレの埃に充ち熱に充ちた空氣が伊太利であるのに間違がないと共に、此の香橙花咲く國はた黄金の果實と鮮かな薔薇との國の空氣も、また伊太利であるのに間違のないことを、肯かすにはゐられないのであつた。

大湖の彼方遙かに、アルプの雪峯がはろくくと見渡された。薄曇の日和のなかに、黄昏が何時しか迫つて來てゐるので、山容一體の色合が薄鈍色の煙のやうに、暈けかゝつてゐるのであつたが、其のなかに山頂の雪だけが、折から射して來た夕陽の光を受けて、ちやうど薔薇の花弁を其處に置いたやうに、鮮かに燦いてゐるのであつた。其の見事な光の花

瓣の上には、それ／＼に雲の影が、半ば燦き半ば曇つて、たなびいてゐた。

其の姿と色合とは、直ちに自分たちに、今までいろ／＼の美術館などで見馴れてゐた此の國の名畫のなかの風景の一部をば、想ひ出させるのであつた。それ等の畫を見る毎に、何時も感じてゐたところの一種の様式の臭味、——其の臭味と思はれてゐたものが、實は此の國に於ては、寫生とも稱すべき程に、現實なものに他ならぬのを、今更に悟ることが出來た氣がするのであつた。此の後も自分は新しく風景を見たり、人の顔や姿を見たりする度に、どれ程さうした古畫のことを想ひ出すのを常としたことであらう。

「やはり其の國まで行つて見ねば——旅に出ると起りが

(1) Raphael.
伊太利の畫家。西曆一四八三—一五二〇。
(2) J. V. Veceano.
伊太利の畫家。西曆一四七七一—一五七六。

(3) St. Moritz.
(4) S. ganzini.
伊太利の畫家。

ちのかうした思が、又しても心のなかに湧くのであつた。自分は藝術が其の生れ出た自然に對する關係は、其處に生える樹や草と少しの差異もないことを、事實に於て信じなければならなかつた。あのアルプの夕陽に輝いてゐる雪頂の上にたゞよふ雲翳の一抹、——もうそれにさへラフアエルやチチアノの畫の後景がありありと見られるのではないか。

雪の上に輝いてゐた夕陽の色は、何時しかに薄れて行く白い色が一際清く寂しく薄雲の空に浮出て來る。

それを眺めてゐる自分の胸には、其の山の彼方に當つてゐるサン・モリッツの佻しい村の姿が、ほのかに浮んで來た其の村に一生を送つた畫家のセガンチニ此の人の畫に描

き出されたあのうなだれた人とうなだれた牛とは、今もなほあのまゝの姿に、此の薄れ行く日の光のなかを、悲しげに歩いてゐるはせぬであらうか數箇月前に伯林の畫廊で見た彼の「故郷への道」の上に、それとなく感ぜられたうなだれた馬の頸についてゐる寂しい鈴の音と、微な晚鐘の響とが、山を見つめてゐる自分の心のなかに、幻のやうに傳はつて來さへもした。

……何時か日はすつかり落ちた汽車はロンバルヂヤの平原をひたすらに南へ南へと、ミラノの町さして走つて行く。

(1) Mirano.

輕薄

二〇 菊花の約 其の一 上田秋成

青々たる春の柳、家園に種うることを勿れ。交は輕薄の人と結ぶこと勿れ。楊柳茂り易くとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交り易くして、去るも亦速なり。楊柳幾度春に染めども、輕薄の人は絶えて訪らふ日無し。

清貧をあまなふ

播磨の國加古の驛に丈部左門といふ博士あり。清貧をあまなひて、友とする書の外は、すべて調度の煩はしきを厭へり。老母あり、孟母の操に譲らず、常に紡績を事として、左門が志を助けぬ。其の季女は同じ里の佐用氏に養はる。此の佐用が家は頗る富み榮えけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘を娶りて親族となり、屢、事に託せて物を贈ると雖も、口腹の爲に人を累さんやとて、敢へて受くる事なし。

起伏も思ふに任せず



上田秋成像

一日左門同じ里の何某が許を訪ひて、いにしへ今の物語して興じける時、壁を隔て、人の苦しむ聲いと哀れに聞えければ、主に尋ぬるに、主、西の國の人と見ゆるが伴に後れしとて、一宿を求められしを、卑しからぬ士と見し儘、逗め參らせしに、其の夜邪熱劇しく、起臥も思ふに任せぬがいとほしさに、三日四日を過しぬれど、何地の人とも定かならぬに、主も思はぬ過し出で、心地惑ひぬ。といふ。左門聞きて、悲しき物語にこそ主の心安からぬもさる事なれど、病苦の人のしるべ無き旅の空に此の疾を憂へ給ふは、わきて胸苦しくおはすべし。其のやうをも看ばや。といふ

死生命あり

を、主留めて、瘟病は人を過つものから、家童らにも敢へてかしこに行かしめず。立寄りて身を害し給ふこと勿れ。左門笑うていふ、死生命あり、何の病か人に傳はるべき。是等は愚俗の言にて、吾が們は取らず。とて、戸を推して入りつゝ、其の人を見るに、主が語りしに違はで、なみの人にはあらぬが、病深しと見えて、面は黄に、肌は黒く瘦せ、古き衾の上にて悶え臥す。人懐かしげに左門を見て、湯一つ恵み給へ。といふ。左門近くよりて、士憂へ給ふこと勿れ。必ず救ひ參らすべし。とて、主と計りて薬を選び、自ら方を案じ、自ら煮て與へ、粥をすゝめて病を看ること猶同胞の如しかの武士。左門が情に厚きに涙を流して、かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御志に報い奉らん。といふ。左門慰めて、凡そ疫には日數あり、

漂客

實やか

其の程を過ぐれば壽命を過たず。吾日々に詣でて仕へ參らすべし。と實やかに契りつゝ、心を用ひて助けけるに、病稍減じて、心地清しく覺えければ、かの士、主にも懇に詞を盡し、左門が陰徳を尊みて、其の生業をも尋ね、己が身の上をも語りていふ、我は出雲の國松江の郷に人と成りし、赤穴宗右衛門といふ者なるが、僅かに兵書の旨を明らめしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師としても、の學び給ひぬ。さて、吾近江の佐々木氏綱へ密使に選ばれて、かの館に逗る中、前の城主尼子經久、山中黨を語らひて、大晦日の夜不慮に城を乗取りしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤三刀屋を助けて、經久を亡し給へとす。むれども、氏綱は外勇にして内怯なる

己が身一つを竊む

愚將なれば果さず、かへりて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身一つを竊みて還る路に此の疾に罹りて、思ひかけずも師を煩はしけるは、身に餘りたる御恩にこそ。吾半生の命をもて必ず報い奉らん。左門いふ、見る所を忍びざるは人たる者の心なるべければ、厚き詞ををさむるに故なし。猶逗りていたはり給へ。といふに、赤穴實ある詞をたよりにて日を経るまゝに、物皆平生に邇くぞなりにける。

おろく

左門はよき友得たりとて、日夜交りて物語するに、赤穴も諸子百家のことおろく語り出で、とひ辨ふる心愚ならず、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、兄たるべき禮儀ををさめて、左門に向ひていふ、吾父母に別れまゐらせたいと久し。賢弟が老母は即ち吾が母なれば、新に拜み奉らんこ

青雲のたよ

とを願ふ老母憐みて幼き心をうけ給はんや。左門喜に堪へず、母常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば、齡も延びなんに、と伴なひて家に歸る。老母喜び迎へて、吾が子不才にて學ぶ所時にあはず、青雲のたよりを失ふ。願はくは捨てずして兄たる教を施し給へ。赤穴拜していふ、大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾今母公の慈愛を蒙り、賢弟の敬を受く。何の望かこれに過ぐべき。と喜び嬉しみつゝ、ぞ逗りける。

涼しき風に
よる浪
間はでもし
るき

昨日今日咲きぬると見し尾上の花も散果て、すゞしき風による浪に、間はでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向ひて、吾近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見ん爲なれば、一たび下りてやがて歸り來り、御恩を返し奉るべし。今の別

を給へ」といふ左門いふ、さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき。赤穴いふ、月日は逝き易し遅くとも此の秋は過ぎじ。左門いふ、秋はいつの日を定めて待つべき。願はくは約し給へ。赤穴いふ、重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。左門いふ、兄長必ず此の日を誤り給ふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待ち奉らん。と互に情を盡して、赤穴は西に歸りけり。

二一 菊花の約 其の二

八雲たつ國

あら玉の月日は疾く經ゆきて、下枝の菜黄色つき、垣根の野ら菊にほやかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも早く起出でて、草の屋の席を拂ひ、黄菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、囊をかたぶけて酒飯の設す。老母いふ、かの八雲たつ國は山

陰の果にありて、こゝへは百里を隔つと聞く。今日とも定め難きに、其の來しを見て物すとも遅からじ。左門いふ、赤穴は信ある武士なれば、必ず約を誤らじ、其の人を見てあわたしからんは、思はんことのはづかし。とて、美酒を買ひ、鮮魚を煮て厨に備ふ。

人の心の秋

午時も稍傾きぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて、心酔へるが如し。老母、左門をよびて、人の心の秋にはあらずとも、菊の色濃きは今日のみかは、歸り來る信だにあらば、空は時雨にうつりゆくとも、何をか怨むべき。入りて臥し、もして、又翌の日を待つべし。とあるに、舌み難く、母をすかして前に臥さしめ、若しやと戸の外に出でて見れば、銀河影消

浦波の音こ
こもとにた
ちくるやう
なり

え消えに、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼ゆる
聲すみわたり、浦波の音ぞこゝもとにたちくるやうなる月
の光も山の端に暗くなれば、今はとて戸をたてゝ入らんと
するに、只見る朧なる黑影の中に人ありて、風のまにゝ來
るを怪しと見れば、赤穴宗右衛門なり。躍りあがる心地して、
「小弟早くより待ちて今に至りぬ。盟違へて來り給ふことの
嬉しさよ。いざ入らせ給へ」といへど、うなづくのみにて物を
もいはず左門進みて南の窓の下に迎へ、座につかしめ、兄長
來り給ふことの遅かりしに、老母も待ちわびて、明日こそと
臥所に入らせ給ふ。寝させ參らせん」といふに、赤穴又頭を振
りてとゞめつゝ、更に物をもいはず左門いふ、既に夜をつぎ
て來給ふに、心も倦み、足も疲れ給ひつらん。幸に一杯を酌み

待ちわぶ

蟲の聲花も
色ある初秋
の夜よしの遊
今宵月の遊
びせん無腸

てやすませ給へ」とて、酒を煖め、下物を列ねてすゝむるに、赤
穴袖をもて面を掩ひ、其の臭ひを忌みさくるに似たり左門
いふ、井臼の力はたもてなすに足らざれども、己が心なり。い
やしみ給ふこと勿れ。赤穴猶答へもせて、長き息をつきつゝ、

此の夜、花をよみて、秋の
月を遊ばせ給ふ

上田秋成筆蹟

暫ししていふ、賢弟が信ある響應をなど否むべき理あらん。
欺くに詞なければ、實を以て告ぐるなり必ず怪しみ給ふな。
吾は現在の人にあらず、きたなき靈の、かりに形を見せつる
なり。左門大いに驚きて、兄長何故に此の怪しきこと語り出
で給ふや更に夢とも覺え侍らず。赤穴いふ、賢弟と別れて國

腹心爪牙

に下りしが、國人大かた經久が勢につきて、鹽冶の恩を顧る者なし。從弟赤穴丹治の富田の城にあるを訪らひしに、利害を説きて吾を經久に見えしむ。熟經久が爲す所を見るに、萬夫の雄人に勝れ、能く士卒を訓練すと雖も、智を用ふるに狐疑の心多くして、腹心爪牙ウツクツツの家の子なし、永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約クキカノヤクあることを語りて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外に放たずして、遂に今日に至らしむ。此の約に違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども、遁るゝに方なし。古人もいふ、人一日に千里を行くこと能はず、魂能く一日に千里をも行く。』と。此の理を思ひ出でて自ら又またに伏し、今夜陰風に乗りてはるく、來り、菊花の約につく此の心を憐み

聲を呑む

給へ』といひ終りて、泪湧出づるが如し。今は永き別なり、只母公に能く仕へ給へ』とて、座を起つと見しが、かき消す如く見えずなり、にけり左門あわてゝと、いめんいめんとすれば、陰風に眼くらみて行方を知らず、俯向につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大いに哭く。老母目ざめ、驚き立ちて左門がある所を見れば、座上に酒瓶、魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中にふし倒れたるを、いそがはしく扶け起して、如何いかにに問へども、只聲を呑みて泣く。更に言なし、老母問うていふ、
「赤穴が約に違ふを怨むとならば、明日もし來らば言なからんものを」と強く諫むるに、左門漸く答へていふ、
「兄長今夜菊花の約に來る。酒肴をもて迎ふるに再三辭み給うていふ、しかじかの事にて約に背くが故に、自ら又またに伏して陰魂百里

漿水

まよひなき

を來るといひて見えなくなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かし奉れ、只々赦し給へ」と潜然と泣入るを、老母いふ、牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渴する者は夢に漿水を飲むといへり。汝も亦さる類にやあらん能く心を鎮むべし。とあれども、左門頭を振りて、信に夢のまさなきにあらざ、兄長はこゝもとにこそありつれ。と、又聲をあげて泣倒る老母も今は疑はず、相よびて其の夜は泣明かしぬ。

身を翰墨によす

翌日左門母を拜していふ、吾幼より身を翰墨によすと雖も、國に忠義の聞えなく、家に孝信を盡さず、徒に天地の間に居る。兄長赤穴は一生を信義の爲に終ふ。小弟今日より出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。尊體を保ち給うて暫くの暇を賜ふべし。老母いふ、吾が兒彼處に去るとも、早

今日を久しき日
生は浮きたる漚の如く
且に夕を定め難し

く歸りて老が心を休めよ。永く逗りて今日を久しき日となすこと勿れ。左門いふ、生は浮きたる漚の如く、且に夕を定め難くとも、やがて歸り參るべし。とて泪を、振うて家を出て、佐用氏に行きて老母の介抱を懇に頼み聞え、出雲の國に參る路に、飢ゑて食を思はず、寒さに衣を忘れてまどろめば、夢にも泣明しつゝ、十日を経て富田の大城に至り、まづ赤穴丹治が宅に行く。丹治迎へ請じて、翼ある物の告ぐるにあらで、いかに知らせ給ふべき謂れなし。と頻に問ひもとむ。左門いふ、士たる者は富貴消息の事共に論ずべからず、たゞ信義をもて重しとす。兄長宗右衛門一旦の約を重んじ、空しき魂の百里を來るに報ずとて、日夜を逐うてこゝに下りしなり。吾が學ぶ所に就いて士に尋ね參らすべき旨あり。願はくは明ら

社稷

かに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀に臥したるに、魏王自ら詣でて手をととりつゝ、告げけるは、『もし忌むべきことあらば、何人をして社稷を守らしめんや。吾が爲に教を遺せ』とあるに、叔座いふ、『商鞅年少しと雖も奇才あり、王もし此の人を用ひ給はずば、之を殺しても境を出すこと勿れ他の國に行かしめば、必ず後の禍となるべし。』と懇に教へて、又商鞅を私に招き、『吾汝を勸むれど王許さざる色あれば、用ひずばかへりて汝を害し給へと教ふ。これ君を先にし臣を後にするなり。汝早く他の國に去りて害を免るべし。』といへり。此の事士と宗右衛門に比べてはいかに。丹治只頭を低れて言なし。左門座を進みて、兄長宗右衛門、鹽冶が舊交を想ひて、尼子に仕へざるは義士なり。士が舊主の鹽冶を捨て、尼子に降り

横死

しは士たる義なし。兄長が菊花の約を重んじ、命を捨て、百里を來しは信ある極なり。士が今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、此の横死をなさしめしは友とする信なし。經久強ひてとゞめ給ふとも、久しき交を思はゞ、私に商鞅、叔座が信を盡すべきに、只榮利にのみ走りて、士家の風なきは、即ち尼子の家風なるべし。吾今信義を重んじて、わざ／＼こゝに來る。汝は又不義の爲に汚名を遺せ』とて、いひも終らず、拔打にきりつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立騒ぐ間に、早く逃れ出でて跡なし。尼子經久此の由を傳へ聞きて、兄弟信義の篤きを憐み、左門が跡をも強ひて追はせざりきとなり。あ輕薄の人と交は結ぶべからずとなん。

— 雨月物語 —

一一一 秋のちまた

永井 荷風

佛蘭西に来て、初めて自分は佛蘭西の風土氣候の如何に
感覺的であるかを知つた。

夏の明るさ、華やかさに引變へて、秋が如何に悲しく、如何
に淋しいか。そしてその悲しさ、淋しさは、心の底深く感ずる
といふよりは、寧ろ生きてゐる肉の上に、しみじみと、譬へば
手で觸つて見る事が出来るやうな氣がするのである。佛蘭
西の詩や音楽が、獨逸のものとは根本的に相違するものも、即
ち此處であらう。^(一) ミュッセを産んだ佛蘭西に、ゲーテは現れ
ず、^(二) ベルリオを生じた佛蘭西に、ワグネルは出ない。北歐の森
の暗さは、神秘を語るであらうが、然し南の方優しい佛蘭西
が、齋す悲哀の中には、言ひがたい美が含まれて居るので、人

(一) Alfred Musset. 佛蘭西の文學者(西曆一八五〇—一八八二)
(二) Hector Berlioz. 佛蘭西の作曲家(西曆一八一八—一八六九)
(三) Richard Wagner. 獨逸の作曲家(西曆一八一八—一八八三)

は其の悲哀によつて何物かを思ひ、何物かを悟るといふよ
りは、直ちに悲哀其のものゝ美に酔うて、恍惚としてしまふ
のである。

月赤く星蒼い夏の夜を浮れ歩き、露清く草匂ふ夏の朝を
喜んで居る中に、何時となく朝夕の風が身にしみて来る身
體の中までも射通すかと思ふやうな明るい乾いた午後
の日光は、氣のつかぬ中に自然と薄れ行き、時にはまるで燈の
光のやうに黄色く見える事さへある。^(一) ラマルチンが、萬象消
え行く秋の日の朧の光ぞいや美しき。そは友のわかれを告
ぐるに似たらずや。そは永へに閉ぢなるとする唇の、臨終の
微笑に似たらずや。^(二) の一句も、今更のやうに思ひ出される。
夏のさかりには八時九時近くまでも、言ふに言はれぬ薔

(一) Alphonse Lamartine. 佛蘭西の文學者(西曆一七八六—一八五九)

Angelus.

微色の黄昏に、天地はどんよりと酔つて居るやうであつたのを、今は寺々に鳴響くアンジェラスの鐘の音を聞く頃には、光なく力なく老いさらばひたる秋の夕陽は沈みはて、其の餘光を留むる空の色は、夏に比して夥しく紫がかり、霧とも靄ともつかぬ薄い夕烟があたりを罩める。

かゝる時、市中の處々に設けてある廣い四辻、噴水や銅像や樹木のある廣い四辻に佇むと、家路に急ぐ人の影のみ際立つて黒く木の間動き、空は一刻々に暗くなりながら、まだ消えやらぬ悲しい黄昏の光に星は見えず、然し地上の燈火ははや初夜らしい光を放つて、樹の影をば黄ばみかけた芝生の上に投げて居る木の葉が一枚二枚と音もなく散つて行くのを、この新しい燈火の光に照して見る程、物哀れ

Rhone.

なものは無い。

かゝる時、ローンの大河に幾筋となく架けられた長い石橋の袂に佇むと、河下、河上、眼の届く限り引續く兩岸の人家も、渦巻いて流れる廣い水の面も、ちやうど洗ひ晒した水彩畫の様に、一望漠然と霞み渡つた濃い紺色の烟の中から、人家の灯、堤上の街燈が點々として赤く朧ろにきらめいて居る。然し橋の上ばかりは両側の欄干に輝く電氣燈の光に、急いで歩む男女の帽子は、風が畠の作物の葉を動かすやうに、なだれを打つて動く。一日の勞働、一日の事務を終つて家路を急ぐ此等の人の足音、馳過ぐる電車や荷車の響は、橋の下に鳴り轟く急流の聲と合して、今や都會が暮れて行く時の「生活」といふ苦痛の音楽を奏するのである。見れば石堤の下

には、洗濯を家業とする幾艘の屋根船、その中では燈をつけながら腕捲した幾多の女が、河水に布をば洗つて居る。かゝる時、町外れなる公園に行くと、如何にも寂然として立つて居る木立の間の瓦斯燈には火がつきながら、人は猶池の邊や、花の小路を散歩して居る。けれども夏の夕に聞くやうな、花やかな笑聲話聲は聞えず、水の邊に生へて居る蘆の葉に秋の風戦ぐばかり。水際の柳が頻に落葉する。星が水に映り出す。濕つた土の匂が一際高く感じ得られる。そして夜が蔽ひかゝるのである。

—荷風全集—

二三 舟旅 其の一 別離 紀貫之

(一)承平五年(一五九五)二月十一日土佐國出發。つとめて泊をおふ

九日つとめて、大湊より那波の泊をおはんとて漕出でけり。これかれ互に國の境のうちとはとて、見送りに來る人あまたがなかに、藤原言實橘季衡、長谷部行政等なん、御館より出で給ひし日より、此所かしこに追來る。此の人々ぞ志ある人なりける。此の人々のふかき志は、此の海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らんとてぞ、此の人どもは追來ける。かくて漕行くまに、海のほとりに留る人も遠くなりぬ。舟の人も見えなくなりぬ。岸にもいふことあるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝれど、此の歌を獨言にしてやみぬ。

おもひやる心は海を渡れども
ふみしなれば知らずやあるらん

追長八事
上佐三信
任地
大湊船
田中餘
此舟

かくて宇多の松原をゆき過ぐ。其の松の敷いくそばく、幾
千年へたりと知らず。本毎に浪打寄せ、枝毎に鶴ぞ飛びかふ
おもしろしと見るにたへずして、舟人のよめる歌、

見渡せば松のうれ木末ことにすむ鶴は

あよのどちとぞ思ふべらなる

とや。此の歌は所を見るにえ勝らず。

かくあるを見つゝ、漕行くまに、山も海もみな暮れ、夜
ふけて、西東も見えずして、天氣のこと、櫂取の心にまかせつ。
男もならはぬは、いと心細し。まして女はふなぞこに頭を
つきあて、音をのみぞ泣く。かく思へば、舟子櫂取はふなう
た歌ひて、何とも思へらず。

二 海 路

うれ
どち
べらなり

音を泣く
思へらず

昔
旅
文

十六日。風浪やまねば、猶同じ所に留れり。唯海に浪なくし
て、いつしか深崎みさきといふ所渡らんとのみなん思ふを、風浪と
もに止むべくもあらず。或人の此の浪たつを見てよめる歌、
霜だにも置かぬかたぞといふなれど
なみの中にはゆきぞふりける
さて舟に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日に
なりにけり。

十七日。くもれる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろけれ
ば、舟を出して過行く。此の間に雲の上も、海の底も、同じ如く
になんありける。うべも昔の男は、

棹しはうがつ波の上の月を
舟はおそふ海の中の天を

曉月夜

(一) 棹穿波底月、
紅塵水中入。
(買島)

とはいひけん。また或人のよめる、

水底の月の上より漕ぐふねの

さをにさはるは桂なるべし

これを聞きて或人の又よめる、

かけ見れば波の底なるひさかたの

空こぎわたる我ぞわびしき

かくいふ間に、夜やうやく明行くに、櫂取等、黒き雲にはか
に出で來ぬ風吹きぬべし御舟かへしてん。といひてかへる
此の間に雨降りぬいとわびし。

二四 舟 旅 其の二

三 都 歸

(二月十一日)

よこほれる

とかくさだ
むる事あり

十一日。雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさしのぼるに、東
の方に山のよこほれるを見て人に問へば、八幡の宮といふ
之を聞きて喜びて、人々拜み奉る。山崎の橋見ゆ。嬉しきこと
限りなし。こゝに相應寺の邊に、しばし舟をとめて、とかく
さだむる事あり。此の寺の岸の邊に柳多くあり。或人、此の柳
の影の川の底にうつれるを見てよめる歌、

さゞれ浪よするあやをば青柳の

かげのいとして織るかとぞ見る

十六日。今日の夕つ方、京へのぼる序に見れば、山崎の店な
る小櫃の繪も、糴餅の法螺の形もかはらざりけり。賣る人の
心をぞ知らぬとぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人
あるじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし

あるじす

時よりは、來る時ぞ人はとかくありける、これにも、それにも、
かへりごとす。

「世の中は何
か常なる飛鳥
川、昨日の淵
は今日の瀬と
なる」(古今
集、讀人不知)

夜になして京には入らんと思へば、急ぎしもせぬ程に、月
いでぬ。桂川月の明きにぞ渡る。人々の曰く、此の川飛鳥川に
もあらねば、淵瀬更に變らざりけり」といひて、或人の歌、

ひさかたの月におひたる桂川

そこなる影もかはらざりけり

又或人のいへる、

天ぐものはるかなりつる桂川

そでをひでてでも渡りぬるかな

又或人よめる、

かつら川わがころにも通はねど

そでひづ

おなじ深さにながるべらなり

志はせん

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる夜更けて來れ
ば、所々も見えず京に入立ちて嬉し家にいたりて門に入る
に、月あかければいとよく有様見ゆ。聞きしよりもまさりて
いふがひなくぞこぼれ破れたる家を預けたりつる人の心
も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、
のぞみて預れるなり。さればたよりごとに、物も絶えず得さ
せたり。今宵かゝること、聲高にもものいはせず、いとほつ
らく見ゆれど、志をばせんとす。

さて池めいて、くぼまり水づける所あり、ほとりに松もあ
りき。五年六年のうち、千年や過ぎにけん、片枝はなくなり
にけり。今生ひたるぞまじれる大方皆荒れにたれば、あはれ

とぞ人々いふ思ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、此の家にて生れし女子も、もろともに歸らねば、いかゞは悲しき舟人も皆子抱きてのゝしるかゝるうちに猶悲みに堪へずして、密かに心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものを我が宿に

小松のあるを見るが悲しさ

とぞいへる猶あかずやあらん又かくなん

みし人を松のちとせに見ましかば

遠くかなしきわかれせましや

忘れ難く、口惜しき事多かれど、え盡さず — 土佐日記 —

自修文

一 菅笠日記

本居宣長

(一) 宣長の吉野花見の紀行文なり。全二巻。
(二) 明和九年三月。
あかりゆく明るくなる
(三) 大和國磯城郡。
心ゆく氣がすむ。
(四) 吉野川の北岸。
(五) 伊勢物語、業平東下り、隅田川の條に「渡守はや舟に乗れぬ日も暮れなん。」
(六) 上市町の南岸。

(一) 八日。初瀬を出でし後雨ふらで、四方の山の端もやうくあかりゆきつゝ、多武の峯のあたりにてはなごりもなく晴れたりしを、今日も亦いとよき日にて、吉野も近づきぬればけさはいと足かろく、皆人の心ゆく道なればにや、程もなく上市に出でぬ。此の間は一里とこそいひしかいと近くて、半里にだにも足らじとぞ覺ゆる。吉野川ひまもなく浮べる筏をおし分けて、こなたの岸に船さしよす。夕暮ならねば、渡守は「はや」ともいはねど、皆急ぎ乗りぬ。あなたの岸は飯貝といふ里なり。さて川邊にそひつゝ、少し西に行きて丹治といふ所より吉野の山にかゝる。稍深く入りもてゆきて、杉むらの中に四手掛の明神と申すがおはするは、吉野の山口神社などにあらぬにや。されど

(一)吉野川の北の渡。古のむつだの淀。
 おほかる限
り 多い頂上。
をこの者 心づきなし
おもしろくな むらぎえた
る まばらに消え
のこつた わが國人
宜長と同郷な る伊勢の國
人。 見つるども
見つる人ど 物すれば
行けば うかゞひつ
けて れらひをつけ
て。 かけても
心にかけるこ と、こゝでは
全くくらゐの 意。

さいふばかりの社とも見えす。此の森より下にも上にも、此のわたりなべて
 櫻のいと多かる中を登り／＼て、登りはてたる所(一)むだ六田の方より登る道との
 行合ひにて、茶屋あり。しばし休む。此の屋は過ぎこし坂路よりいと高く見や
 られし所なり。こゝより見渡す所を一目千本とかいひて、大かた吉野のうち
 にも櫻の多かる限りとぞいふなる。げにさも有りぬべく見ゆる所なるを、誰
 てふをこの者かさるいやしげなる名はつけけんといと心づきなし。
 花はおほかた盛過ぎて、今は散残りたる梢どもぞ、むらぎえたる雪のおも
 かげして、所々に見えたる。抑、此の山の花は、春立てる日より六十五日にあた
 るころほひなん、いづれの年もさかりなると世にはいふめれど、又わが國人
 の來て見つるどもに問ひしには、かのあたりのさかりの程を見て、こゝに物
 すればよき程ぞと、これもかれもいひしまゝに、其の程うかゞひつけていで
 立ちしもしるく、道すがらとひつゝ來しにも、よき程ならんと多くはいひつ
 る中にまだしからんとこそいひし人もありしか、かく盛過ぎたらんとはか
 けても思ひよらざらしぞかし。なほこゝにてくはしく問ひきけば、此の二月きさらぎ

けにや せいであらう
か。 それも
それも うつろふ
散る。 え定めぬ
きめることは 出来ぬ。

(一)吉野金峯山の 鎮守。金剛藏
王権現を祀 する。
(二)藏王堂を去る 三町。大寶年
中行者役小角 山上修行の庵
室であつたと 野の遺蹟と吉
いふ。後、吉 野朝の遺蹟と
なり。今吉水 神社がある。

のつごもりがたいと暖なりしけにや、例の年の程よりも今年はいと早く咲
 出で侍りつるを、いにし三日四日ばかりやさかりとは申すべかりけん。そも
 雨しげく風ふきなんどせし程に、まことに盛と申しつべき頃も侍らぬやう
 にて、なんうつろひ侍りにしと語るを聞けば、其の年々の寒さぬるさにした
 がひて、遅くも疾くもあることにて、必ず其の程とかねては、此の里人もえ定
 めぬわざにぞ有りける。
 こゝは吉野の里に入る口にて、これよりは町屋なちつゞけり。まづやどり
 をとらんとて、藏王堂(一)むだにはまゐらで過ぎゆく。堂はあなたにむかひたれば、か
 の門はうしろの方にぞ立てりける。其のあたりに清げなる家たづねて、宿を
 定めてまづしばしうち休み、物食ひなどして、けふ明日の事ども語らひ道
 するべすべき者やとひて、まづ近き所きを見めぐらんとて出でたつ。此の借
 りつる宿は箱やの何がしかいふものゝ家にて、吉水院(二)むだ近き所なりければ
 まづまうづ。此の院は道より左へいさゝか下りて、又しばし登る所はなれた
 る一つの岡にて、めぐりは谷なり。後醍醐の帝のしばしが程おはしまし、所

物ふりたる古びた。
た、すまひ有様。
かけまくはかしこけれど口にかけて申し上げるのは、
多量多いことだが。

とて、有りしまゝにのこれるを入りて見れば、げに物ふりたる殿のうちのた
たすまひ、よの常の所とは見えす。かけまくはかしこけれど、
いにしへの心をくみてよし水の
ふかきあはれに袖はぬれけり
かのみかどの御像後村上帝の御手づから刻み奉り給へるとておはします
を、拜み奉るにも、

あはれ君この吉水にうつり來て

のこる御影を見るもかしこし

煙ふきつゝ、
煙草のみながら。
吉野水分峯。
子守明神といふ。
ひまなくすまなく。

又そのかみの古き御寶物ども數多ありて見けれど、悉くはえしも覺えず。此
の寺の内にさゝやかなる屋のまへうちはれて見渡しの景色いとよきがあ
るにたち入りて、煙ふきつゝ見わたせば、子守の御社の山むかひに高く見や
られて、其の山にも、かたへの谷なんどにも、ひまなく見ゆる櫻どもの、今は青
葉がちなるぞ返す返すくちをしき。さはいへど與なる花は、さかりと見ゆる
もなほ數多ありて、

みよし野の花は日數もかぎりなし

青葉のおくもなほさかりにて

瀧櫻といふもかしこにありと教ふ。

咲きにはふ花のよそめはたちよりて

見るにもまさる瀧の白絲

暮るゝまで見るとも飽く世あるまじうこそ。

さて藏王堂に詣づ。御とばり掲げさせて見奉れば、いともの、大きな御
像の、忿れるみ顔して、片御足さゝげて、いみじう怖ろしき様して立を給へる
三柱おはする。たゞ同じ御やうにてけぢめ見え給はず。堂は南向にて、壁も横
も十丈餘りありとぞ。作り様いと古く見ゆ。前に櫻を四隅に植ゑたる所のあ
り、四本櫻といふとかや。堂の傍より西へ石の階を少し下れば、即ち實城寺な
り。本尊の左の方に後醍醐天皇、右に後村上院の御位牌と申す物たゞせ給へ
り。此の寺も前の限り、藏王堂のかたに續きて、後も左も右も皆稍下れる谷な
り。されどかの吉水院よりは稍程廣し。此の所ばかりそめながら五十年餘り

よそめ
ほかで見ると。

御像
藏王(金剛藏
王)の像。
さ、けて。
あけて。
け、つめ。
差別。

前の限り
前の方だけす
つかり。

こと所
他所。

作庭
人工的に作つ
た庭。

物より
何物よりも。

(一)大和國高市
郡。

(二)吉野郡龍門
村。

(三)南葛城郡。大
和國西界の峻
嶺。

はるかに。
遙かに。

の春秋をへて三代の帝のすませ給ひし御行宮（みゆきみや）の址なりと申すはいかゞあ
らん。事たがへるやうなれど、をり／＼おはしましなれどせし所にてはあり
ぬべし。今は堂も何も造り改めて、そのかみの名残ならねど、なほめでたく心
にくきさまこと所には似ず。此の寺を出でて、もとの道に歸り、櫻本坊など
いふを見て、勝手（てり）の社は此の近き年焼けぬるよし、今はたゞいさゝかなる假
屋におはしますを、拜みてすぎ行く。此の社の隣に、袖振山とて、小高き所に小
さき森のありしも、同じ折に焼けたりとぞ。御影山といふも、此の續にて、木繁
き森なり。竹林院堂の前に珍しき竹あり。一つ節毎に四方に枝さし出でたり。
うしろの方に面白き作庭（つくりに）あり。そこより少し高き所へあがりて、よもの山々
見渡したる景色よ。まづ北の方に藏王堂、町屋の末に續きて、物より高く目に
かゝれり。なほ遠くは多武の山高取山、それに續きて、東北（しご）の方に龍門（りゅうもん）の嶽な
んど見ゆ。東と西とは谷のあなたに、ま近き山にあひ續きて、かの子守の御社
の山は南に見あげられ、西北（しほ）のかたに葛城山はいと／＼はるに霞の間より
見えたる、なんどすべてえもいはず、面白き所のさまなり。

花とのみ思ひ入りぬる吉野山

よものながめもたぐひやはある

時うつるまでぞ見をる。ゆくさきなほ見どころはおほきに、日くれぬべしと
おどろかせど、耳にも聞きいれず暮れなげの（一）。なんどうち誦（す）して、

あかなくに一よはねなんみよし野の

竹のはやしの花のこの本

かくはいへど、ゆくさきの所々もさすがにゆかしければ、そこにたてる櫻の
枝に、此の歌は結びおきて立ちぬ。

二 古學の傳統

平田篤胤（二）

まづ第一に申して置かねばならぬ事は、此方の學を古學といひ、學ぶ道を
古道と申す故は、いにしへ儒佛の道、いまだ御國へ渡り來らざる以前の純粹
なる古の意と古の言とを以て、天地の初よりの事實をすなほに説き考へ、其
の事實の上に、眞の道備つてある事を明らむる學問である故でござる。

二 古學の傳統

おどろかせ
ど。

傍の者が注意
をするが。

(一)いざ今日は
春の山邊にま
じりなげの暮

花の盛なげの
花の盛なげの

(古今集)素性は
法師)花の盛

しがないで、は
れば、其の後に

やどるばかりに
だとの意。

(二)江戸時代の國
學者。秋田の國
人。天保十四
年(二五〇三)
歿。年六十八。

(一) 徳川家康。

(二) 徳川義直。

黄門
中納言の唐
名。

抑、此の學風の由つて來る其の始は、東照大神君其の絲口を開かせられ、公
子尾張の源敬公其の御遺意を紹がせられ、さて水戸中納言光圀卿大きに興
起あらせられた事でござる。此の君の世にすぐれておはせる事は、世の人の
能く存じ居ること、即ち世に水戸の黄門様と申すは、此の御方の事でござ
る。此の君が世の中に唯々唐の學問ばかり行はれて、御國の古き御代の事な
どは心とする者のなき事をお歎きなされ、第一には禁裡を殊の外御尊敬あ
らせられ、數多の學者を御抱へ遊ばし、まづ世に有り、とある古書を御集めな
され、又諸國の神社佛閣及び在々に至るまで、數多の人を分ち遣はされて、い
さゝか一枚二枚に足らぬものも古き書物をば悉く御集めなされ、それを明
細に御吟味あつて、神武天皇の御代より後小松天皇の御代まで、御代は百代
年數二千年餘りの間の事を具に御撰びありて、大日本史といふ歴史を御作
りなされ、又古書はもとより堂上方の世々の御記録を始め數百部の書物の
中より、朝廷の御禮儀に關る事どもを御類聚なされて、五百卷餘の書となさ
れたでござる。此の大業の御入用として、御高三十五萬石の内十萬石を分け

堂上方
公御方。

類聚
種類によつて
算めること。

(一) 俗姓下河。十
三歳高野山に
上つて、僧とな
る。後諸國を
軍歴し、大坂に
に卜居して家
をつたへた。

(二) 水戸藩の儒
者。年山と號
した。享保元
年(一七二六)
歿。年五十。

おかれまして、誠に數十年の御辛勞で、遂に御成就なされ、さて朝廷に奉られ
た處が、朝廷には御感斜ならず思し召し、右五百卷の御書物に、禮儀類典とい
ふ題號を御つけ下されたでござる。又其の頃難波に契沖といふ人があつて、
之は故有つて、眞言の僧とは成つたなれども、厚く御國の古を信じ、學んで中
頃より亂れ來りし假名遣を古書の古言を證據として正し、和字正濫抄とい
ふ書を著し、其の外いろ／＼發明の書物を作つて、其の名高く、光圀卿の御耳
に入り、殊の外感じ思し召し、度々御使者を遣はされたが、契沖は固く御辭退
申して罷り出でななだでござる。所が光圀卿には甚だ御慕ひなされて、安藤
爲章といふ御國學に志の厚い御家臣を契沖の門人に遣はされ、且萬葉集は
殊の外古い歌集で、歌のみならず、博く古を考へる助となるべき結構なる書
物なれども、其の頃まで世にある所の註解何れも良しくないに依つて、よく
古に叶ふべき註を仕るべき由御頼みなされたでござる。契沖畏つて、是に於
て萬葉集の代匠記といふを撰んで差上げました。萬葉學は是より始つた事
でござる。光圀卿之を御覽なされた所が、今までのあらゆる註釋とは事變り、

(一)京都稻荷山の
祠官。元文元
年(二二九六)
歿。年六十九。

悉く古言古意を尋ねて之を記し、甚だ優れたる物故に、大きに御悦びなされ
て、白金千兩、絹三千匹を下されたでござる。契沖其の賜物を更に蓄へず、悉く
貧窮の者に與へられたといふ事で、又右の代匠記を作るとして、夥しく古書を
集め考へた時、其の餘力を以て古今集にも註を下して、之をば餘材抄と名を
付けたでござる。此の註釋は其の時分まであつたのとは雲泥の違で、誠に結
構なものでござる。扱契沖は元祿十四年正月廿五日に、年は六十三歳で身ま
かられた。其の著した書物すべて廿五部、卷數百廿卷餘もあるでござる。

此の契沖に追ひすがつて、荷田宿禰春滿翁俗名を羽倉齋宮といふ人が出
られて、大きに御國の學問を勵み弘められて、四方に其の名高く、既に御國學
の學校を京都に建てようとして、公の御免を受けられ、其の地をば東山にしつ
らへようとせられたところが、其の事果さず、病によつて身まかられたでご
ざる。此の翁著述の書すべて數十部、卷數百卷あまりありたるよしなれども、
今纔かに遺りたるもの五六部、數卷ならでは無いが、我が古道學の道紀を立
てられたのは此の人でござる。此の次が賀茂の縣主眞淵の翁通名を岡部衛

(一)江戸の國學
者。安永六年
(二四三三)
歿。年五十三
(又五十七)。
(二)下總の人。天
明二年(二四
十四)歿。年六
十。
(三)江戸の國學
者。芳宜園と
號す。文化五
年(二四六八)
歿。年七十五。
(四)江戸の國學
者。織錦齋又
琴後翁と號
す。文化八年
(二四七二)
歿。年六十六。
高
す。子孫。

士といふ人で、家の號を縣居とつけられたに依つて、縣居の大人また縣居の
翁などとも申すでござる。さて此の翁、荷田の大人の門人となり、其の本志を
ついで勤學いたされたでござる。

さて此の眞淵の翁は、其の師春滿翁の上を今一段上つて、なほ深く考へ、始
めて古の道を明らかに得んとするには、漢意佛意を清く捨て、はてねば眞の
處は得がたく、歌を詠むも、古の言を解くも、みな神代の道を知るべき便なる
由を懇にとき誨され、遂に田安の殿に召出され、御國學の御師範を申し
上げられたでござる。其の門人にも勝れた人が多く、藤原宇萬伎、楫取魚彦、ま
た近頃までも在世した加藤千蔭、村田春海なども、皆此の翁の弟子でござる。
さて此の翁は、明和六年十月晦日に、行年七十三にて身まかられたでござる。
其の著された書物が四十九部、卷數が百卷ちかくあるでござる。

此の次は、即ち拙者どもが師と仰ぐ本居先生平阿曾、美宣長の翁で、初は醫
を業とせられたに依つて、本居舜庵といはれましたが、後に紀伊國中納言殿
に召出されまして、中衛と改められたでござる。其の先祖は桓武天皇の御裔、

(一)平忠盛の第五子、清盛の異母弟。文治二年(一八四六)歿。年五十五。

池大納言頼盛卿六代の後胤本居縣判官平の建郷と申した人の末にて伊勢の國松阪の人で、家の號を鈴の屋とつけられたに依つて世に鈴の屋の大人とも鈴の屋の翁とも申すでござる。さて此の翁の學問のいみじきことは世に類なく、それは其の著された書どもを讀み明らむれば能く知れることで、申すまでは無けれども、其の初は漢の學問を深く學ばれてそれより御國の學に移り、縣居の大人に従つて其の大志を受繼がれ、學問の道に於ては古より類なき大功を立てられたでござる。其の御心緒の事をかい摘んで申さば、まづ其の著されたうひ山ぶみといふ書に言はれた趣は人として人の眞の道はどうしたものでといふことを知らずに居るべきことではない。學問の志なき者は、そりやどうも爲方は無けれども、かりそめにも其の志があるならば、同じくは眞の道の爲に力を用ふべきことぢや。然るに道の事をばなほざりにさしおいて、唯末の事にばかりかゝづらつて居るといふのは、それは學問する者の本意ではないと言はれ、又學問は初より其の志を高く、大に立て、其の奥の所まで極め盡さずば止むまいと、堅く思ひこむがよい。此の志

かゝづらふづむはる。な

が弱くてはおのづから倦み怠ることが出るものぢやとも言はれましたでござる。此の通り人にも教へられる程のこと故に、自分は實に此のとほりいたされたでござる。是も亦其の著された書どもを讀めば能く分りますでござる。

其の門人帳を見まするに弟子のない國は六十六箇國の内に唯二箇國ならではない程のことで、殊に享和元年の春上京致されて、四條に舍つて居られたみぎりなどは、公家の御歴々がた、學問を公に心がけらるゝ御方は翁の宿へ御尋ねありて、御入門なされ世にも人の知つて居る中山大納言殿を始め參らせ、富の小路新三位殿、芝山中納言殿など、其の外夥しくありましたでござる。既に其の頃御歌の宗匠とあらせらるゝ日野一位資枝卿ですら、御感心の餘りに、其の御孫日野中宮權大進殿と申すを遣はされ、翁を師と御頼みなされて、其の始めて入らせられた時の御歌が「和歌の浦に行方を辿る海士小船今より君を楫と頼まん」と仰せられたでござる。此の外にも御尋ねなされる御方々が、各此の心ばへの御歌を御詠みなされ、何れも翁をさして本居先

(一)中山愛親。勤王家の曾て、藤原の朝廷へ五箇條の難題を自ら語や、愛親自ら語して、愛親命に全うして、歸つた。文治七年(一一八二)歿。年七十四。

生鈴の家の翁又は鈴の屋の大人と御尊み遊ばし御頼みなされて翁の講釋を御聽きなされ閑院の宮様妙法院の宮様までも翁を召されて御慕ひ遊ばし實に千古の昔よりかやうの事はありは致さんでござる。さて翁の著された書物が五十五部卷數百八十餘卷あつて何れも一學問する者は常に傍を放されぬ物で一部一冊として是はと人の手を拍たぬものは無いでござる。さて此の先生は享和元年九月廿九日に御年七十二にて身まかられたでござる。猶是等のことは別に委しく記した物があります。今は彼の驅けて通ると申す程のこと故に大略の中の又大略を申すのでござる。

—古道大意—

三 羽衣の傳説

駿州の三保の松原空も水も一つ色に澄渡つて遙かに見やる富士の高嶺の雪、近くは寄返る荒磯の波と、天地を青と白に染分けて居る。いづくよりもなく、一片の白雲のやうにひらりとこゝに下り立つたものがある。照る日

に輝く薄衣うすころもを松が枝に掛けて清い汀に浴したのは天つ少女かざめである。白龍といふ此のわたりの漁夫、此の薄衣を松の上に見つけて携へ歸らうとする。それを取られては再び天に上ること叶はず、是非かへし給へと歎けば、天人の舞樂を奏し給はゞかへし申すべしとこゝに奏かなぶる霓裳いらい羽衣うしうの曲、天つ少女は羽衣を得て、天上へ歸つて行くといふのが、謠曲わかしよ「羽衣」の概要である。謠曲の文には佛語ぶつごが加つて居つて、其の文を見ると、お寺の欄間らんまなどに彫つてある天女を聯想するが、これは我が太古から傳はつた神話である。しかもそれが方々にあつたのである。

古い風土記(一)の今日に残つて居る文から見ると、近江國と丹後國に同じやうな話がある。近江國伊香郡よこさ與胡郷こさ伊香小江いかなに八人の天つ少女が白い鳥となつて、天から下つて江の南の津に浴した。伊香刀美いかにといふ男、こは神に相違なからうと覗ひらつて居たが、竊に白犬をやつて、一人の天女の羽衣を盗ませた。神女之が爲に遂に天上に歸ること能はず、伊香刀美の妻となつて、男女各二人の子を産んだ。

(一)元明天皇の御代諸國に命じて上進せしめられた地方誌。

〔今、中郡。〕

もう一つは丹後國丹波郡三家西北の隅の方に比治里ひぢりといふ所がある。此の比治山の頂に眞井まなみといふ井があつたが、或時天女七人こゝに來て浴した。わなさ老夫おきなわなさ老婆おきなといふ老人夫婦が之を見て、其の一人の羽衣を取隠した。其の天女はやむことを得ずして、老夫婦の子となつて十年程住んだが、其の間に天女はよい酒を醸し一杯飲めば萬病立ちどころに癒るといふので、老夫婦の家は忽ちに富み榮えた。然るに恩知らずの老夫婦は、其の後此の天女を追出したので、天女は天に歸ることも出來ず、諸處を流浪したといふ話である。白鳥の下つた話は尙常陸風土記にも見えて居つて、其の話に多少の相違はあるが、とにかく餘程ひろく傳播でんぱした話らしく見える。謠曲の「羽衣」は畢竟此の美しい古傳説を基礎として作つたものである。

〔Swan.〕

所が面白いことには、これは決して日本固有のものではなくして、世界中に弘く擴がつて居る話である。西洋では白鳥即ちスワンスワンが最も美しい上品な鳥と考へられて居るが、天女が此の白鳥となつて浴して居る中、其の羽を取られて歸れなくなるといふ同じ筋の話が澤山ある。よつて傳説學者は之

〔Swan Maiden.〕

〔Mikhailo Ivanovitch.〕

〔Finland.〕

〔Guiana.〕

をスワンメイドン式の説話と名づけて居るのである。所々國々によつて少しづつ違ふが大體の筋は變らぬのである。瑞典では若い獵師が、三つの白鳥が羽を棄て、海中に浴するのを見付けた。其の中の一つの羽衣を隠して置くと、他と一緒に歸れぬので、遂に其の獵師の妻となつたといふ。露西亞のミハイロイワノウミチといふ男は、海邊を逍遙して、水中に浴して居る一羽の白鳥を見た。矢を以て射取らうとすると、やがて美しい女となつて現れた。白鳥ばかりでなく、外の鳥の話になつて居るものもある。極北に近いフィンランド人の話では、死んだ父親が三人の息子の夢枕に立つて、夜海邊へ行つて雁を見よと告げる。二人は闇夜を恐れて行かなかつたが、一番末の弟は夜中張番はりばんをして居る。夜明方に三羽の雁が來て、皆其の羽を脱いで美しい少女となつて海水に浴した。其の中の最も美しい一人の羽衣を隠して渡さぬので、少女は遂に其の男の妻となつた。雁でなくて家鴨と傳へられて居る所もあるが、又或地方では鳩になつて居るものもある。

三 羽衣の傳説

地つゞきの亞細亞歐羅巴ばかりでなく、南亞米利加南のギヤナギにも同じ話

[Armax.]

[Ananina.]

がある。^(一)アラワックスといふ土人の話に、或時一人の獵師が美しい鳥をつかまへた。これは天上に國を有する王様^(二)アヌアニマの娘で、やがて人間の形になつて、其の獵師と結婚したといふ。これには尙長い話がある。エスキモーでは其の鳥が海鳥になつて居る。

[Pomerania.]

^(三)ボメラニヤの話に次のやうなのがある。獵夫が森の中をたどつて沼の脇へ出ると、一人の少女が沐浴して居るのを見た。多分近處の村からでも來たものと考へて、いたづらに其の着物を隠した。少女は水から上つて、是非返してくれといふのを拒絶して、遂に其の少女を妻とした。其の着物は錠をおろして、箆の中へ入れておいたが、夫の不在中妻は其の姑に向つて是非其の着物を見せてくれといふ。姑がそれを出して見せると、忽ちそれを持つて見えなくなつてしまつた。夫は歸宅して妻の行方を尋ねると、これから色々の冒險譚になるのである。或地方になると、鳥ではなくして獸になつて居るものもある。海豹^(四)が毛衣を脱いで浴して居る話もある。白鳥が雁や鳩や、色々な鳥になり、はては獸にまで變つて居るが、其の道筋

は全く同じである。これは其の國の風土動植物の差から起つて來るのである。謡曲の「羽衣」には鳥の事はないが、前に擧げた近江丹後常陸等の風土記の話も皆白い鳥である。天から少女が下つたといふ話には、天武天皇が吉野の瀧の宮にお出でになつて、唯一人琴を弾じていらせられると、雲の中で少女が袖を振つて躍つたのを御覽せられた事がある。これがそも／＼五節の舞といふものの始であるが、つまりは同種類の話である。かういふ世界一般に擴がつた話が太古からあるといふことは面白いことでは無いか。

四 和歌百首

あらたまの年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯の聲 素性法師
明日よりは若菜摘まんと占めし野に昨日も今日も雪はふりつゝ 山部赤人
三島江の霜もまだひぬ蘆の葉のつぐむほとんどの春風ぞふく 藤原通光
を筑波も遠つ足尾もかすむなり嶺こし山こし春や來ぬらん 賀茂真淵
鶯のあかつきおきの初ごゑに今はとしらむ春の夜の月 香川景樹

(一)攝津國三島郡
三個牧村。淀
川の西岸。
つぐむの、
蘆などの芽ぐ
むないう。
(二)常陸國。をば
美稱。
(三)下野國。

軒の玉水
軒から落ちる
雨だれのこ

京都嵐山の下
を流る。保津
川の下流。桂

空に知られ
ぬ云々
散る花を雪に
見たてたので
ある。

つくふと春のながめの寂しきはしのぶにつたふ軒の玉水
春といへば霞みにけりなきのふまで波間に見えし淡路島山
山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえんかゝる雪の玉水
初瀬野や里のうなるに宿とへば霞める梅のたち枝をぞさす
照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき
あをによし奈良の都は咲く花の匂ふがごとくいま盛なり
大堰川月と花とおぼろ夜にひとり霞まぬ浪のおとかな
宿かさぬ人のつらさをなさけにて朧月夜の花のしたぶし
薄墨にかく玉章と見ゆるかな霞みてかへる春のかりがね
大空は梅のほひにかすみつゝ曇りもはてぬ春の夜の月
空はなほ霞みもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月
夕月夜汐みち來らし難波江の蘆のわか葉をこゆるしら波
櫻ちる木のした風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける
櫻狩雨はふりきの同じくはぬるとも花のかげにかくれん

僧行慶
俊惠法師
式子内親王
契沖
大江千里
小野老
小澤蘆庵
蓮月
津守國基
藤原定家
藤原良經
藤原秀能
紀貫之
讀人知らず

(一)河内國北河内
郡。昔は櫻の
名所として、
大宮人が遠逝
の地であつ
た。
(二)龍田川の
名。大和國生
駒郡生駒川の
下流。
(三)東京市の東部
を貫流する。
八重霞
り立つ霞にも重
一重は霞の重
此の霞の一重
は霞の籠をや
く煙であつた。

春來てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ
世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし
梅が香をさくらの花に匂はせて柳が枝にさかせてしがな
殿守のとものみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな
み山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり
夏山の青葉まじりのおそ櫻はつ花よりもめづらしきかな
行きくれて木の下蔭を宿とせば花やこよひの主ならまし
またや見ん交野のみ野の櫻狩花の雪ちる春のあけぼの
山寺の春のゆふぐれ來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける
大堰川かへらぬ水に影見えて今年も咲ける山ざくらかな
かはづ鳴く神奈備川にかげ見えて今や咲くらん山吹の花
春雨のふるは涙か櫻花ちるを惜しまぬ人しなけれは
すみだ川簀きて下す筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ
藻鹽やく難波の浦の八重霞一重は蟹のしわざなりけり

藤原公任
在原業平
中原致時
源公忠
源頼政
藤原盛房
平忠度
藤原俊成
能因法師
香川景樹
厚見王
紀貫之或は
大友黒主とも
加藤千蔭
契沖

春風の云々
春風に花の静
かの方に散る夕暮
のびしとつて
さびしいと
意

待たじと思
へば
あきらめて待
つまいと思へ
ば生憎に時鳥
の啼きさうな
雨もよひの空
になつて來
た。

(一)山城國紀伊
郡。伏見稻荷
より南。大龜
谷に至る間。
(二)近江國滋賀
郡。琵琶湖の
西岸。

春の野に莖つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける
萩の葉の身にしむよりも春風の花に聲なきゆふぐれの庭
蓮葉はすはのにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく
さ月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする
いづ方に鳴きてゆくらん時鳥淀のわたりのまだ夜深きに
行きやらで山路くらしつ時鳥いま一聲の聞かまほしさに
いかにせん來ぬ夜あまたの時鳥待たじと思へば村雨の空
橘のかをれる宿のゆふぐれに二聲なきて行くほとゝぎす
松かげの岩井の水を掬すくびあげて夏なき年とおもひけるかな
昨日こそ早苗とりしかいつの間に稻葉そよぎて秋風の吹く
春はたゞ花のひとへに咲くばかり物の哀れは秋ぞまされる
夕されば野邊の秋風身にしみてうづらなくなり深草(一)の里
うづら鳴く眞野(二)の入江の濱風に尾花なみ寄る秋のゆふぐれ
濡れてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我は經にけり

山部赤人
松平定信
僧正遍昭
讀人知らず
壬生忠見
藤原義孝
藤原家隆
賀茂真淵
惠慶法師
讀人知らず
藤原俊成
源俊賴
素性法師

(一)鳴の飛立つ澤
の意で地名
はないに鳴
大磯の地名
とあるの地
世この歌は
つて作つた
のであつた
のつてあつ
た。

(二)信濃國東筑摩
郡洗馬附近の
廣原。武田信
玄と小笠原長
時の古戰場。

いかばかり
上流より紅葉
ののいたく洗
てくるのでい
ふ。

心なき身にも哀れは知られけり鳴立つ澤の秋の夕ぐれ
秋はなほ夕まぐれこそたゞならぬ萩の上風萩の下つゆ
白雲に羽うちかはしとぶ雁のかすさへ見ゆる秋の夜の月
明けばまた越ゆべき山の嶺なれや空ゆく月の末の白雲
武藏野は月の入るべき山もなし尾花がすゑにかゝる白雲
水の面にてる月なみをかぞふれば今宵ぞ秋の最中なりける
秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくもの糸すぢ
きりくすいたくな啼きそ秋の夜のながき思は我ぞまされる
ものゝふの草むすかばね年ふりて秋風さむし桔梗(二)が原
みる人も無くて散りぬる奥山の紅葉は夜のにしきなりけり
下紅葉かつ散る山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のなくらん
山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿のなく音に目をさましつゝ
龍田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦なかや絶えなん
後士よ待てこととはん水上はいかばかり吹く山のあらしぞ

西行法師
藤原義孝
讀人知らず
藤原家隆
源通方
源順
文屋朝康
藤原忠房
加藤字萬伎
紀貫之
藤原家隆
壬生忠岑
讀人知らず
藤原資宗

一信濃國東筑摩郡梓川と奈良野の間の廣野。たわに。たわむほどに。

外山。深山に對して里近い山をいふ。

煙をだに云。煙だけでもたやすまいと。

心もしぬに。心がしぬれて。天智天皇の大津の都を思ひ出したのである。

二大和國高市郡。稻淵山に發し初瀬川に合す。

朝まだき嵐の山のさむければ紅葉のにしき着ぬ人ぞなき
信濃なるすがの荒野を飛ぶ鷺のつばさもたわにふく嵐かな
暮るゝより松に吹立つわが山のあらしの末を誰か聞くらん
荒熊はゆくへもしらす杉山のうつばに籠るこがらしの風
津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり
み山には霞ふるらし外山なるまさきのかづら色づきにけり
淋しさに煙をだにもたえじとて柴折りくぶる冬の山里
木の葉ちる宿は聞きわくことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も
み吉野の山かき曇り雪ふればふもとの里はうちしぐれつゝ
夕されば海上がたの沖つ風雲るに吹きて千鳥なくなり
近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへおもほゆ
駒とめて袖うちにはらふ蔭もなし佐野のわたりの雪の夕暮
昨日といひ今日と暮して飛鳥川ながれて早き月日なりけり
世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬となる

藤原公任
賀茂眞淵
香川景樹
加納諸平
西行法師
讀人しらす
和泉式部
源 頼實
俊惠法師
賀茂眞淵
柿本人麿
藤原定家
春道列樹
讀人知らず

末の露。草の葉末の露。もとの草。草の根本のしづく。一攝津國東成郡。

二攝津國東成郡。

明日知らぬ我が身と思へどくれぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ紀貫之
有るは無く無きは數そふ世の中にあはれいづれの日まで歎かん 小野小町
明日ありと思ふ心のあだ櫻夜半にあらしの吹かぬものは 親 鸞
形見こそ今はあだなれこれなくば忘るゝ時もあらましものを 暹 昭
末の露もとの雫や世の中のおくれ先だつためしなるらん 後徳大寺實定
奈吳の海の霞の間よりながむれば入日をあらふ沖つ白浪 讀人知らず
我が心なぐさめかねつ更科やをばすて山に照る月を見て 藤原顯輔
夜もすがら富士の高嶺に雲きえて清見が關にすめる月影 加藤枝直
天の原てる日のちかき富士の嶺に今も神代の雪はこのれり 村田春海
心あてに見し白雲は麓にて思はぬ空に晴るゝ富士の嶺 讀人知らず
紫の一本ゆゑに武藏野の花はみなから哀れとぞ見る 讀人知らず
われ見ても久しくなりぬ住吉の岸のひめ松いく世へぬらん 紀 友雄
草も木もわが大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき 大中臣能宣
千歳までかぎれる松も今日よりは君にひかれて萬代や經ん

大中臣能宣

君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけん住吉の松
 筑波嶺のこのもかのもとに蔭はあれど君がみ蔭にます蔭はなし
 住吉の松を秋風吹くからにこゑうち添ふる沖つ白浪
 橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常磐の木
 海ゆかば水づく屍草ゆかば草むす屍大君の邊にこそ死なら願はせじ
 今日よりは願なくて大君の醜の御楯と出でたつ我は
 ものゝふの取傳へたる梓弓引きては人のかへすものかは
 花さかぬ老木の櫻朽ちぬとも其の名は昔の下にかくれじ
 戈とりて月見るたびに思ふかないつか屍の上にてるやと
 大丈夫は名をし立つべし後の世に聞きつぐ人も語りつぐがね
 これのみぞ人の國よりつたはらで神代をうけし敷島の道

醜の御楯と
 卑しい身なが
 ら君國の干城が
 となつて

語りつぐが
 ね
 語りつぐやう
 に。

讀人知らず
 讀人知らず
 凡河内躬恒
 聖武天皇
 今奉部與會布
 不讀人
 梶原景季
 人見恩阿
 森五六郎
 六伴家持
 藤原爲相

三訂帝國讀本卷九終

通用字及び正字對照表

劔	剪	刃	函	滅	涼	準	准	况	決	冒	兔	免	佞	佞	兩	通用正
劍	翦	刀	函	滅	涼	準	准	況	決	冒	兔	免	佞	佞	兩	通用正
冤	墻	塚	場	噴	噐	唇	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	通用正	
冤	牆	塚	場	噴	噐	唇	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	通用正	
拔	拿	戲	懣	懣	慨	恒	徃	稟	屏	并	帽	尅	實	寇	通用正	
拔	拏	戲	懣	懣	慨	恆	往	廩	屏	并	帽	剋	實	寇	通用正	
濱	温	氷	殲	欸	概	桿	晋	昂	既	整	携	擯	擯	插	通用正	
濱	溫	冰	殲	欸	概	杆	晉	昂	既	整	攜	擯	擯	插	通用正	
盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	猫	猪	猿	熔	陰	潜	闊	通用正	
杯	鼓	癡	略	畧	畫	瑣	玄	貓	豬	猿	熔	陰	潛	闊	通用正	
續	續	紀	穀	粘	籤	纂	節	竽	竊	秘	頤	穎	稟	研	通用正	
續	續	紀	穀	黏	籤	纂	節	竽	竊	秘	頤	穎	稟	研	通用正	
厠	勅	冲	傍	俟	京	亡	並	万							通用正	
廁	敕	沖	傍	埃	京	亡	並	萬							通用正	
婚	姉	妍	妊	野	坂	囁	叶	厮							通用正	
婚	姉	妍	妊	埜	阪	囁	叶	厮							通用正	
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳							通用正	
攷	慙	富	忘	菴	島	峰	峨	嶽							通用正	
概	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普							通用正	
槩	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普							通用正	
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	昆	朴							通用正	
砧	睹	狸	貉	无	煙	汚	毗	樸							通用正	
緜	總	網	紕	糾	綜	筍	競	稿							通用正	
縹	總	網	紕	糾	糺	筍	競	稿							通用正	

附錄

同字表 (いづれにて)

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。)

羈 羈 花 華 衽 衽 谿 通 遜 雁 鴈
 船 船 荒 荒 訛 譌 踪 蹤 銓 矛 雞 雞
 櫓 櫓 虱 虱 譁 嘩 跚 跚 鏤 鏤 駮 駮 驅 驅

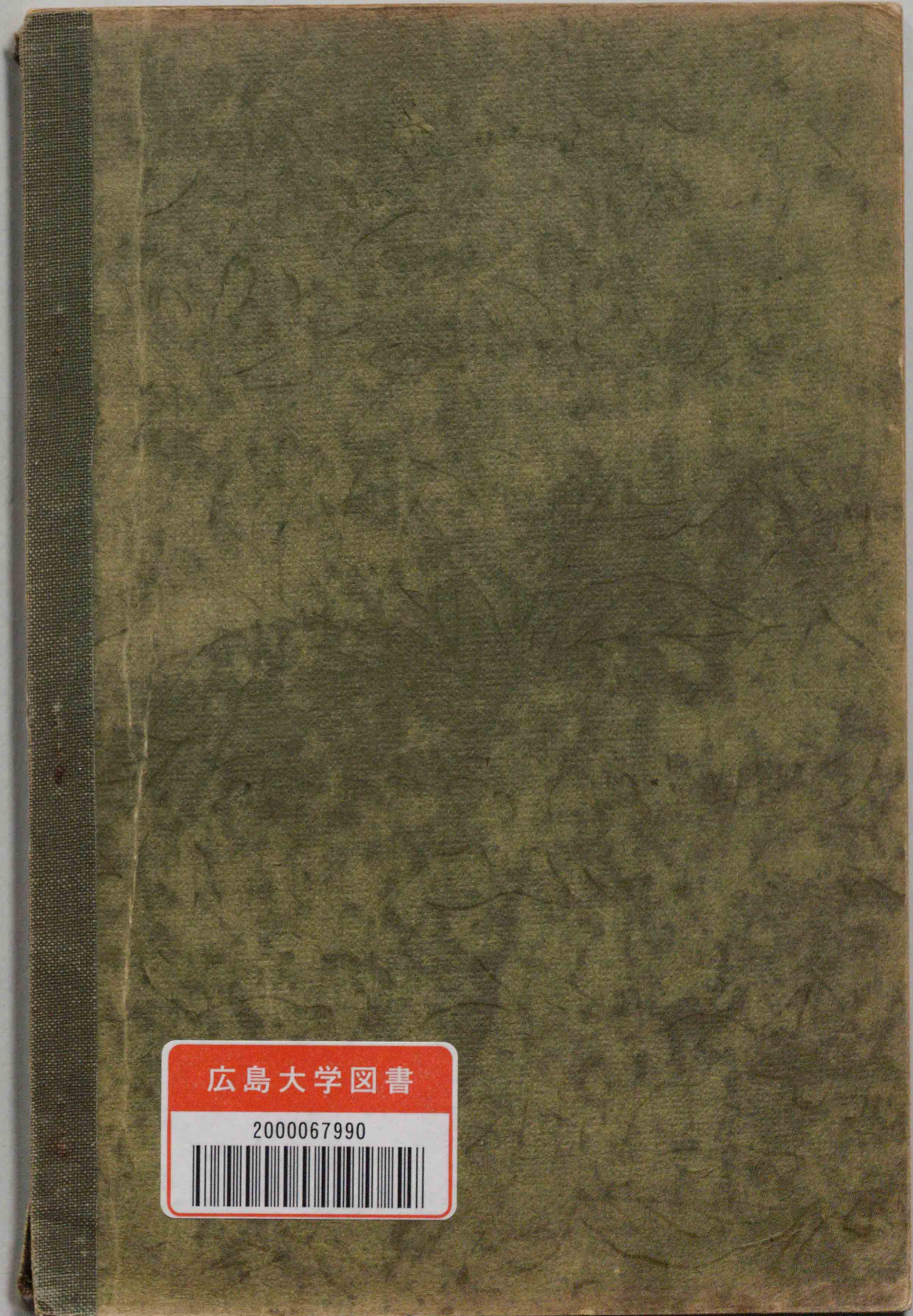
本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ畧字トシテ往々混用セララル、モノ。標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

互 互
 恒ニ同ジ。
 體 體
 策ニ同ジ。アラシ、倉、粗。
 但 但
 タマシ、タマ。「但馬」
 ツタナシ、拙劣。
 僭 僭
 ミダリガハシ、猥。
 身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
 胄 胄
 カブト、兜。「甲冑」
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「胄裔」

協 協
 カナフ、叶。
 オビヤカス、脅。
 刺 刺
 サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」
 臺 臺
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
 後 後
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
 キミ。「皇后」
 商 商
 アキナヒ。
 モト、本。
 壺 壺
 ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。
 姫 姫
 ツ、シム。
 ヒメ。

托 托
 拓ニ同ジ。オス、ヒラク。
 担 担
 ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。
 担 担
 ハラフ。又アケ。
 ニナフ、カツケ。
 改 改
 鬼ヲ追フトイフ屋ノ神。
 アラタム。
 鎗 鎗
 ヤリ。
 鎗ニ同ジ。鎗ノ聲ノ形容。
 欠 欠
 アクビ。「欠伸」
 カク。「缺席」
 糸 糸
 ホソイト、細絲、
 イト。
 羨 羨
 支、ノ地名。
 ウチヤム。

虫 虫
 魚介類ノ總稱。又マムシ。
 ムシ。
 詔 詔
 ワビ、ワブ。「詔狀」
 詔ニ同ジ。アザムク。
 証 証
 ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。
 證 證
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。
 豊 豊
 禮ノ古字。
 ユタカ。
 迄 迄
 マテ。
 ユク、行。
 撰 撰
 エラブ。「ヨリトル」
 エナブ。「書物ヲ編纂ス」



広島大学図書
200067990
